

ムセイオン

～博物館の物語～



森川 惣太

目 次

プロローグ	P1
I. 三つの泉	P5
II. 日下部文書	P51
III. 羽衣の桜	P78
IV. まぼろしの電車	P107
V. 赤と黒	P160
VI. マダム・ホワイト	P199

様々な人たちが一つの世界観を共有しながら自由に物語を創作していく「広場小説構想」のスターターとして書いたものです。

URL : <http://mouseion.la.coccan.jp/>

プロローグ

すみれ色のスカーフが、風に乗って空を舞っていた。

ぼくは思わず、それを追って走った。

手が届いた瞬間、やわらかな感触が駆け抜けた。

春休みの遊園地、小学生だったぼくは色とりどりの遊具を見ながら歩いていて、飛んでいくスカーフを見つけたのだった。

スカーフには金髪の女性が描かれていた。

母は「案内所の人に預けておきなさい。」と言ったが、なぜか自分で持ち主に返したいと思った。

「きつと、あれに乗ってる人が落としたんだよ。ここで待ってる。」

ぼくは上空を通っていく気球の形をした乗り物を指さした。

「あの人だ。」

女の子の声でした。振り返ると母親らしい女の子と歩いてくる少女が見えた。

「すみません。そのスカーフ、この子が落としたものだと思うんですけど。」

女の子に言われて、ぼくはスカーフを差し出した。

「ありがとう。」

スカーフを受け取った少女は、うれしそうにぼくを見上げた。

少女の持っていた赤いバッグにスカーフを入れながら、女の子が言った。

「そうだ、もしよかったらご一緒にませんか。この子も一人で遊ぶのは寂しそうですし。」

その日、ぼくたちは、観覧車やジェットコースターに乗ったり、ヒツジやウサギにえさ

をやったりして、夕方まで過ごした。

「また遊ぼうね。」

帰り際、少女はそう言って手を振った。

ぼくもうなずきながら手を振ったのだけれど、いったいどうやって会うつもりだったんだろうか。

次の年の同じ日にも遊園地に行こうと思ったが、風邪をひいて行くことができず、その後すぐに遊園地は閉園になってしまった。

その時からずっと、あの少女にまた会いたいと思い続けていた。正直に言うと、幼い日に一度会っただけの、名前も知らない彼女に好意を持っていた。

でも、もう一つ気になっていたのは、スカーフに描かれていた女性の絵だ。

その絵はどこかで見たものだったように思うのだが、あの日のぼくは少女と遊ぶのに夢中で、絵のことをたずねるのを忘れていた。

何回目かの春が来て、遊園地のあった場所に行ったぼくの前には、巨大な博物館が建っていた。

I. 三つの泉

(一)

「すみません。店員さん……ですよね。」

声をかけられて振り向くと、白いシャツに薄緑色の上着を着た若い女性が、ノートパソコンを抱えて、ちよつと怯えたような様子で立っていた。

「このパソコンのファイルが見られなくて。」

いつもの持ち場は家電売場とカメラ売場。パソコン売場には応援で来ていたので、自分だけで対応できる自信はなかったのだが、接客用のテーブルに案内した。

彼女はテーブルの上にノートパソコンを置いて、ゆっくりと開いた。画面には飛び立つ

二羽の白鳥の絵と、何か詩のような文章があった。

「ファイルが見られないというのは、どのような状態でしょうか。」

「連絡先」というファイルをクリックすると、パスワードの入力画面が現れた。上下二つの入力欄があつて、上の入力欄の後には「川」、下の入力欄の後には「園」の字があつた。

「実は、同居していた人に譲ってもらったものなんです。行き先を言わないままで出て行ってしまったので、ここに連絡先が書いてあると思つたんですけど、パスワードがわからなくて……。」

「申し訳ありません。こちらでは、パスワードの解除には対応できません。」

僕はとっさに話を遮るように答えてしまい、彼女の表情が曇るのを見て後悔した。

少しの間、沈黙の時が流れた。彼女が泣きそうになっているのではないかと思つて焦つた僕は、必死に言葉を探した。

「あの、最初の画面にあった文章が気になったんですが、何だったのでしょうか？」

彼女は画面をもとに戻してから答えた。

「これは阪神間の場所について書いたものだと思います。それ以上は教えてくれませんでした。」

「阪神間の場所？」頭の中に、さっきの「川」と「園」の文字が浮かんだ。それこそがパスワードなんじゃないのか。何の根拠もないが、自分がこの相談を受けたことが何かの導きのような気がして、後戻りできなくなった。

「写真を撮らせてもらってもいいですか。」ちょうどデジタルカメラを持っていたので、ノートパソコンの画面を撮影した。

「お力になれるかどうかわかりませんが、調べさせていただきます。二週間ほどしたら、ご連絡ください。」僕は名刺を差し出した。

「本当ですか。嬉しい。ありがとうございます。」

彼女が泣かないようにしようとしていたのだが、身体を震わせて泣いてしまった。

「青木さんですね。どうぞよろしくお願いします。」

彼女は深々と頭を下げて、店を出て行った。

撮影した画面には、こんな言葉が書いてあった。

ひおうぎの夢

白妙のうのはな

春はさくら

一つめは曾祖父

二つめは父

三つめは女の筆

冷たい泉の中心から

王の旅立ちを望む

僕は今度こそ、本当に後悔した。

よく考えたら、業務の範囲を超えてお客様の依頼を受けてしまった。それに、「阪神間の場所」と聞いたときは重要な発見をしたように思ってた。調子に乗っていたが、これが何を意味しているのか、全く見当がつかない。さっきの彼女が流していたのは嬉し涙だったのだろうか、次は悲しみの涙を流させることになるかもしれない。

「阪神間の場所……。阪神間の場所……。」売場に立ったまま、うわごとのように繰り返

していた僕は、あるところに行く決心をした。それは昔からずっと気になっていた場所。そして、少年の日の耐え難い焦燥が蘇ってきそうで、これまで足を踏み入れることができなかった場所。

「阪神間総合博物館」だ。

(二)

ドアノブにかけた手が、まだ震えていた。

家には他に誰もいない。夕暮れの静けさの中で、遠くから車の通る音が聞こえる。

妙子は薄緑色の上着を脱いでハンガーラックにかけると、ベッドに倒れこんだ。

どうしてもあの「連絡先」のファイルの中身が見たくて、何軒もの電器店を訪ね歩いた。

そして断られるたびに、心を打ちのめされた。絶望しかけていた時によく、話を聞いてくれる人がいたのだ。あの店員さんはきっと、神様がめぐりあわせてくれたに違いない。

彼女はシートに顔をこすりつけながら、三か月前に路上で転倒した時の、アスファルトの冷たさを思い出していた。

倒れた場所は車道だった。誰かの悲鳴が聞こえて、体を動かそうとしたが、なぜか動かなかった。「もうだめだ」と思った瞬間、駆け付けた青年に助けられた。

彼女はお礼にと、青年を食事に誘った。彼は「みくりや たびと」と名乗り、勤め先の人員整理で解雇されて、次の職を探しているところだと話した。前の住居も出ていかなければならなくなり、新居を探しているというので、しばらく家に泊まるように勧めた。

青年は歴史と文学に詳しくて、いろいろな人物や史跡の話を持って聞かせた。最初は興

味がなかったのだが、彼の話を聞くうちに魅かれるようになっていった。青年もまた、妙子が描いた花のスケッチをとても気に入って、部屋に飾った。

ある日、二人で向かい合って夕食を食べていると、彼が言った。

「妙子さんは本当に素敵な人だと思います。もし僕が無職でなかったら、交際を申し込みたいくらいです。」

妙子は驚いて「変なこと言ってないで、しっかり仕事を探してください。」と答えたが、本当は身体が熱くなるほど嬉しいと思った。

しかし数日後、彼は姿を消した。後にはノートパソコンといくらかの現金、そしてこんな手紙が残されていた。

安原 妙子 様

ごあいさつもせずにお別れすることをお許しください。

お宅に泊まるように勧められた時、「こんな幸運があつてよいものか」と耳を疑いました。少しは冷静になるべきだったのに、あなたと楽しい生活がしたい、という欲望には逆らえず、お言葉に甘えて、ずいぶん長い間、お世話になってしまいました。

ただ、自分で言うのはおかしいですが、私のような素性の怪しい者を家に入れたのは、本当はとても危ないことだったのではないのでしょうか。

あなたは私を命の恩人だと思つて、尽くしていただいているのでしよう。しかし、あの時は周りに大勢の人がいたし、車は止まっていました。私がいなくてもあなたは無事だったはずですから、お気遣いは無用です。

これ以上のご負担をおかけすることは許されないと思うので退散しますが、幸福な思い出を忘れることはありません。

みくりやたびと

追伸 ノートパソコンとお金は、せめてものお礼です。必要ないと言われるかもしれませんが、私の気休めだと思って、どうかお受け取りください。

その後、妙子は必死に青年の消息を尋ねたが、「みくりや たびと」という名前は仮名だったらしく、彼の行方はわからないままだった。そして「連絡先」というファイルだけが、手掛かりとして残された。

(三)

初めて阪神間総合博物館を訪れたのは、水曜日の昼下がりだった。

噴水や水路を備え、幾何学模様の植込みで構成された広大な庭園の先には、半円筒形の赤瓦が並んだ屋根と、落ち着いたクリーム色の外壁を持った、荘厳な建造物がいくつも立っていた。

入口横の券売機で入場券を買って入館すると、三階まで吹き抜けの巨大なエントランスホールがあった。上階の周囲は装飾を施された回廊が囲んでいる。ホールの向こうはガラス張りで中庭が見え、その左右から大階段が上階に続いていた。

「すみません。この文章の意味について調べたいんですが。」僕は受付で、ノートパソコンの画面の写真を見せて言った。隣にある相談コーナーに案内され、しばらくして、奥の部屋から眼鏡をかけた女性が出てきた。

「こんにちは。学芸員の春川と申します。」彼女は胸に下げた名札を両手で突き出すようにして自己紹介した。年齢は二十代くらいだろうか。

僕は、画面の写真を彼女に渡した。

「勤めている電器店のお客様から相談されたんですが、この画面に表示されている文章が何を意味しているのかわかりません。調べることはできないでしょうか。」

「これは、その方が自分で書いたものではないのでしょうか。」春川さんは、不思議そうな顔で聞いた。

「このパソコンは同居されていた方から譲り受けたものなのですが、その人が突然いなくなってしまう、連絡先のファイルを見ようとしたらパスワードを要求されて、連絡先がわからなくて困っているそうです。そのパスワードが『川』と『園』なんです。」

ああだめだ。これだけでは意味不明だ。そうだ、肝心なことを言い忘れていた。

「この文章は、阪神間のある場所を示しているそうです。その場所が、『川』と『園』というパスワードなのではないかと思えます。」

「そうですか。」春川さんは、写真の文章をゆっくりと声に出して読み始めた。

ひおうぎの夢

白妙のうのはな

春はさくら

一つめは曾祖父

二つめは父

三つめは女の筆

冷たい泉の中心から

王の旅立ちを望む

それから彼女はしばらく写真を見つめて考えていたが、急に笑顔になって言った。

「調べてみます。30分ほどお待ちいただけますか。」

「30分？ そんなにすぐわかるんですか。」

「まずレトリバーの助けを借りて調べます。もしそれ以上の調査が必要なら、回答は後日になりますが。」

レトリバー？ 何だそれは？、と思っていると、彼女が続けた。

「すみません。レトリバーはこの博物館で実証実験をやっている情報システムです。まだ完成していませんが、キーワードの一致だけではなく、様々なものごとの内容や地域性、直接・間接の相互関係なども考えて、役に立ちそうな情報を探してくれます。」

システムの内容はよく理解できなかったが、そんなものを使ってもらえるのなら、何か成果が得られるような気がした。

「もうすぐエントランスシアターが始まります。よかったら、あちらの中庭の前の椅子

でご覧ください。」春川さんはそう言って、奥の部屋に入っていった。

中庭の前の椅子には、すでに十数人の人が座っていた。僕が席に着いてすぐ、中庭の窓がスクリーンになって、映像が流れ始めた。

施設の概要、地域の自然と歴史、そして街並みや伝統の祭りなどが、次々と映し出される。大きなスクリーンが近くにあるので、まるで映像の中の世界に入り込んだような、すごい臨場感だ。

映像が終わると、スクリーンだったところは再び中庭の景色になった。周りの人は席を立てて展示室に向かったが、春川さんとの待ち合わせまであまり時間がなかったので、そのまま中庭を眺めて待つことにした。

整然とした正門前の庭園とは対照的に、中庭には様々な種類の花が自由に配置されていて、自然な印象を受けた。この博物館に入るときには少し勇気が要ったのだが、こんな風

景を眺めていると何か心が洗われるような感じがする。そういえば、あの少女と手を振って別れたのはちようどのあたりだったんじゃないだろうか。今はどこでどうしているんだろう。

(四)

「お待たせしました。」後ろから声をかけられて、僕は時計を見た。しまった、もう30分を過ぎている。春川さんが呼びに来てくれたのだ。何に使うのか、彼女はタブレット端末を手にしていた。

「正解かどうかわかりませんが、一応の答えは出ました。」

「本当ですか。ありがとうございます。」

「お見せしたいものがあります。一緒にいらしてください。」

春川さんは先に立って歩き始めた。展示室を抜け、扉を開けて長い廊下を通り、また扉を開けて外に出て、少し離れた別の建物に入っていく。森林や草原を精巧に再現した巨大なジオラマのエリアを抜けてしばらく進むと、見渡す限りに様々な植物が植えられたところがあった。

「ここは地域植物の見本園です。近郊の野生植物を集めて、観察できるようにしてあります。」

少し歩いて目的の場所に着いたらしく、彼女はこちらを向いた。

「これがヒオウギです。」

そこには、シヨウブのような細長い葉をした植物がいくつか植えられていた。

「葉っぱが平面状に広がっていて、扇（おうぎ）のように見えませんか。」

「確かにそう見えます。」

「この植物の名前のもとになった檜扇（ひおうぎ）は、平安時代ごろに使われていた、ヒノキの薄い板で作られた扇で、扇子のルーツだと言われています。今はまだ小さいですが、夏には大きくなって、きれいな花が咲きます。」

彼女がタブレットを操作すると、画面に花の写真が表示された。風車のようなオレンジ色の花に赤い斑点があつて、かなり派手な印象だ。

「そこである文章ですが、『ひおうぎの夢』といういい方はあまりしません。思いつくのは、『うばたまの』という和歌の『枕詞（まくらことば）』です。」

「うばたま？」

「これがうばたまです。」

ヒオウギの前に、ケースに入った黒光りのする小さな粒が展示してあつた。

「うばたまはヒオウギの種（たね）です。『ぬばたま』『むばたま』などとも読まれます。」

『う』はカラス。烏龍茶とか烏骨鶏とかいうときの『う』です。『ば』は羽。つまり、カラスの羽のように黒い玉という意味です。

このように真っ黒なので、古典和歌では、『うばたまの』は『夜』や『夢』という単語の前に置かれて、語調を整えたり印象を深めたりする『枕詞』として使われています。

「それではなぜ、『うばたまの夢』ではなく、『ひおうぎの夢』としたのでしょうか？」

「それは『うばたまの夢』と書いたら、すぐに和歌の一部だと気づかれてしまうからです。いずれにしても、和歌に少し詳しい人なら察しがつきます。

それで、この文章の一行目と四行目、二行目と五行目、三行目と六行目はそれぞれ対になって、三つの和歌を示していると推定しました。それから次の『冷たい泉の中心』ですが、『冷たい泉』は温泉以外の泉、つまり湧き水などのことでしょう。したがって、三つの和歌にちなんだ三つの泉があつて、その中心の位置を意味している、と考えて探しました。」

「それでは第一の和歌です。『うばたま』、あるいは『ぬばたま』『むばたま』と『夢』を含む和歌はたくさんありますが、「曾祖父」を手がかりに特定することができました。」
タブレットに和歌が表示された。

(古今和歌集より)

うばたまの 夢になにかは なくさまむ うつつにだにも あかぬ心は ふかやぶ

(夢の中で会って何の慰めになるだろうか。現実の世界で会ってさえ満たされない心なの。)

「この歌の作者は百人一首の歌人、清原深養父（きよはらのふかやぶ）です。『枕草子』で有名な清少納言の曾祖父とされています。」

「そうか。『作者は有名な人の曾祖父』という意味だったんですね。」

「そうです。そして、この歌には仕掛けがあります。」

「2句目の最後から2文字、3句目の最初から3文字を続けて読んでみてください。」

『か・は・な・ぐ・さ』ですか？」

「これは『物名（もののな）の歌』と言って、歌の意味内容とは関わりなく事物の名を詠みこむ技法です。」

『かはなぐさ』ってなんでしょうか？」

「これからお見せします。」春川さんの後について、さっき通ってきた場所に戻り、別の通路を進むと、今度は様々な姿の小川や水路を再現したエリアに着いた。小川には魚が泳ぎ、水辺の草は白い花を咲かせている。周囲には多くの水槽が置かれている。

「ここは水棲生物の展示場です。見ていただきたいのはこちらです。」

そこには上の開いた水槽に、清らかな水が小さな音を立てて流れ、中央部には大きさが10センチくらいの茶色の塊がいくつかあった。近づいてみると、無数の細い毛糸のよう

なものが集まってゆらめいていた。一本一本に色の濃い部分と薄い部分が交互にあつて、細かい縞模様のように見える。

「これがカワモズクです。正確にはチャイロカワモズクという種類です。」

「えっ、川にモズクが生えているんですか？」

「そういえば、酢の物にして食べるモズクとそっくりだ。」

「よく似ていますが、モズクはコンブやワカメなどと同じ褐藻類、これはアサクサノリなどと同じ紅藻類になります。いくつかの説がありますが、『かはなぐさ』は川の菜っ葉の草と書いて、このカワモズクなのではないかと言われています。そして、これが生えていたのはこんなところですよ。」

水槽の向こうに写真パネルがあった。街中によくありそうなコンクリートの溝。ネットフェンスを隔てた向こうは線路。そして通過するあずき色の電車。阪急電車だ。

「ここは阪急今津線、甲東園駅近くの線路わきにある溝です。見た目にはよくわかりま

せんが、ここには『鉱泉』という湧き水が出ているのです。昔は溝の底の砂を噴き上げるように水が湧き出していたといえます。」

そこなら何度も通っているのだが、こんなものがあるとは知らなかった。

「じゃあそこが……」

「そう、深養父の和歌に関連のある湧き水、ということ、ここを第一の泉と推定しました。」

「次に行きましょう。」

本館に戻り、フロアを見渡せるシースルーエレベーターに乗って上階に行くと、ドアの閉まった部屋があった。春川さんは読取機にカードをかざしてドアを開けた。

「どうぞ。今回は貸し切りです。」

そこは数十席ほどの部屋で、黒い色の壁に囲まれていた。

「二行目にあった卯の花は、こんな花です。」春川さんがタブレットを操作すると、周りの壁全体が屋外の景色になって、正面には新緑の中に群れて咲く白い花が映し出された。壁そのものがディスプレイになっているようだ。

「これはウツギという木の花。枝が中空なので、『空ろな木』ということウツギと呼ばれています。奈良時代には、すでに生垣として使われていました。」

「それでは第二の和歌です。今回の手がかりは、もうお分かりですね。」

「清少納言のお父さん、ですか。」

「そうです。第二の和歌の作者は清原元輔（きよはらのもとすけ）。この人も百人一首の歌人です。『白妙の卯の花』を読んだ和歌も多くありますが、清原元輔が詠んだと言われているのがこちらです。」

今度は前の壁に和歌が表示された。

(清原元輔集より)

けふも又のちもわすれじ しろたへのうのはなにほふ やどとみつれば 元輔

(いつまでも忘れはしない。)

まっ白な卵の花が美しく咲いているのがあなたの家だと、この目に焼き付けたから。)

『匂う』という言葉は、今では『香りがする』という意味ですが、古くは『美しく咲いている』という意味で使われていました。それから『宿』は『泊めてもらった家』という意味です。『一夜(ひとよ)の宿を借りる』とか言いますね。」

「それで、泉との関係は……。」

「やはり『宿』の字に注目しました。温泉のある宿泊施設ならいくつもあります。『冷たい泉』となっているので除かれます。『宿』と湧き水の両方に関わる場所として探し出したのがこちらです。」

周囲に映る景色が伝統を感じさせる街並みになった。正面には白壁と黒い瓦の対比が美しい日本建築が見える。

「宝塚市立小浜宿（こはまじゆく）資料館です。これからバーチャルツアーで訪ねていただきます。」

格子戸が開き、館内の景色が変わる。正面には宿場町のまち並みを再現したらしい大きなジオラマ。右側には古代の銅鐸を展示したケース。左側にはたくさんの道具や絵が展示されている。

「小浜は室町時代に建立された毫撰寺（ごうしょうじ）を中心に発展した地域で、江戸時代には宿場町として栄えました。この資料館は、戦国時代の武将・山中鹿之介の子孫である山中家の敷地の跡に作られたものです。」

春川さんがタブレットを操作すると景色が進んでいく。

画面の中で、奥の格子戸が開いて外に出る。景色が右に動いたのは、左を向いたからだ。前には四角い石造りの立派な井戸があった。上に水をくむための滑車がついている。

「この井戸は『玉の井（たまのい）』と言って、山中家の敷地にあったものです。」

井戸の蓋を開けて中を覗く映像になった。水が湧き出して、音が反響している。

「豊臣秀吉が羽柴秀吉と名乗っていたころ、有馬温泉に向かう時に、同行していた千利休がこの井戸の水で茶をたてました。その水がすばらしいものだったので、秀吉は奈良時代の貴族・橘諸兄（たちばなのもろえ）の山荘の名水にちなんで、「玉の井」と題するよう
に言ったということです。」

「それではこの井戸が……」

「井戸になっているので普通は『泉』とは呼びませんが、元輔の和歌に関連のある湧き水、ということ、ここを第二の泉と推定しました。」

「次は第三の和歌です。手がかりは六行目にある『女の筆』。」

「作者は女性、ということでしょうか？」

「そのとおりですが、これは『女性の筆跡』という意味だと思います。和歌には『詞書（ことばがき）』といって、歌の前に置かれる、歌の題や歌を詠んだ事情などの説明文が付いていることがあります。そして『春はさくら』と詠んでいる和歌の中で、詞書に女性の筆跡であることが示されているものがこちらです。

前の壁に和歌が表示された。

（千載和歌集より）

都遷り（みやこうつり）など聞こえける又の年の春、白川（しらかわ）の花盛りに
女の手にて花の下に落としをきて侍りける

かくばかり うき世のすゑに いかにして はるはさくらの なほにほふらん よみ人知らず

(こんなにもつらい世の末に、どうして春には桜が美しく咲くのでしょうか。)

『女の手(をんなの手)にて』が、『女性の筆跡で』という意味です。京都にある桜の名所、白川の花盛りには、女性の筆跡で書かれた和歌が花の下に落としてあったのだそうです。いわゆる『落し文(おとしぶみ)』ですね。」

それがどのようにして和歌集に載ったのだろうか。何だかミステリアスな話だ。

「それでは、現代の白川をご覧ください。川の流れている位置は、当時と少し違うようです。」川のほとりに続く風情のある街並みと、桜の並木が映し出された。行き交う人々が本当にそこにいるように見える。

「ここで注目したのは、詞書の『都遷り』。1180年、政治の実権を握っていた平清盛が進めた京都から福原、今の神戸市兵庫区への遷都を指しています。『又の年』というのは

翌年ですから、この和歌が詠まれたのは1181年、ということになります。この遷都では、福原以外にも昆陽野、現在の伊丹市あたりが移転先の候補地になっていたということです。」

「その遷都が、三つ目の泉と関係しているんですか。」

「この時の遷都ではありません。これよりさらに300年ほど昔にも伊丹市あたりが都の候補地になり、絵の名人の巨勢金岡（こせのかなおか）という人が派遣されて、当地の景色を描いて天皇のところへ献上した、という伝説があります。そのとき、自然に水が湧き出て、金岡はこの水を使って絵を描いたということです。この湧き水を金岡の清水と言います。」

「それが三つ目の泉ですね。」

「そうです。第三の和歌に関連のある湧き水、ということと、第三の泉と推定しました。一年中清らかな水が湧き出ていて、靈験あらたかな泉と言われていたそうですが、江戸時

代の終わりころには水が枯れてしまい、もう見ることはできません。ただ、今でもこの湧き水があったあたりは清水町、その近くから流れ始める川は金岡川と呼ばれています。」

「これで三つの泉が揃いました。」前の壁に、大きな地図が表示された。

「甲東園の鉱泉、小浜の玉の井、金岡の清水、三つの位置はここです。」地図にきれいな三角形が浮かび上がる。

「この一辺が約5 kmの三角形の中心を、経度と緯度から計算します。」画面がズームアップされていくと、川のほとりにある薄茶色の建物の写真が映し出された。

「伊丹市の西野雨水ポンプ場。大雨の時に地域を水害から守るための施設です。ここが『泉の中心』になります。」

『王の旅立ちを望む』という言葉の意味が全くわからないんですが。」

「確かに文章だけでは何のことかわかりませんが、画面にあった白鳥の絵がヒントになると思います。」

ああ、絵のことを忘れていた。

『王』というと『王様』を思い浮かべますが、日本では、一部の皇族を『王』と呼んできました。そして白鳥と関連する皇族では有名な人がいます。古代史の英雄、ヤマトタケルです。亡くなった後、その魂は巨大な白鳥になって飛び立ったといわれています。」

『王』というのは、ヤマトタケルを指しているのですか。」

「いいえ。この地域にゆかりがあるのは、『香坂王（かごさかのみこ）』と『忍熊王（おしくまのみこ）』です。二人はヤマトタケルの息子、仲哀天皇と大中姫命（おおなかひめ）

の間に生まれました。母の死後、新しく皇后になった神功皇后（じんぐうこうごう）と戦うことになったのですが、兄の香坂王は戦いの吉凶を占う狩りで大猪に殺され、弟の忍熊王も神功皇后との戦いに敗れて琵琶湖に身を投げました。その後、二人とも神功皇后の息子である異母弟の応神天皇が慰霊をしようとしたときに、魂が白鳥になって飛び立った、という話が伝えられています。」

「そうか、それなら二羽の白鳥が飛び立つ絵と一致します。」

「そして白鳥になった兄の香坂王が飛び立ったところは六甲山脈の東の端近くにある砂山権現、弟の忍熊王が飛び立ったところは宝塚の中山寺の境内にある白鳥塚古墳のあたりだと言われています。」

『旅立ちを望む』というのは…。」

『二人の魂が白鳥になって飛び立ったところを遠望する』という意味だと思います。ま

ず、西野雨水ポンプ場から砂山権現の方角を見ると……「地図の上に新たな線が引かれる。

「最初に通る川は『昆陽井川（こやゆがわ）』です。」川の名前と流路が表示された。

「井戸の『井』と書いて『ゆ』と読むんですか？」

「井戸の『井』という字は、『い』と読むと『水を汲む場所』という意味、『ゆ』と読むと『農業用水』という意味になります。昆陽井川は武庫川から取水している農業用水です。」

「それでは、その昆陽井川が……。」

「そう、第一のパスワードではないでしょうか。」

次に白鳥塚古墳の方角を見ます。「地図にもう一本の線が伸びてゆく。」

「目の前に『十六名公園（じゅうろくなこうえん）』があります。」今度は公園の名前と範囲が表示された。

「第二のパスワードは、『十六名公園』ということになります。」
ついにたどり着いた。

「お疲れさまでした。これが正解であることを祈りましょう。」
春川さんは笑顔で言った。

(六)

妙子が電器店の青木さんに電話したのは、店に行ってからちようど二週間後の夕方だった。「ご都合の良い日にいらしてください。」とのことなので、翌日の朝10時に予約して、会社の休みを取った。

開店と同時に、妙子は店に入った。

「おはようございます。お疲れ様です。」彼女を見つけた青木さんが駆け寄ってあいさつ

した。無意識に言っただけかもしれないが、朝まで寝付けなかったのを言い当てられたような気がして、どきりとした。

前回と同じ接客テーブルに案内される。

青木さんが言った。

「パスワードの候補は見つかりました。もし違っていたら申し訳ありません。」

妙子はノートパソコンのスイッチを入れて、パスワードの入力画面を開いた。

「すみません。よろしくお願いします。」

「それでは申し上げます。上のパスワードは昆陽井川。昆虫の昆、太陽の陽、井戸の井です。」

「はい、入力しました。」

「下のパスワードは十六名公園。漢数字の十六に名前の名、最後は公園の公だけ入力してください。」

「開いたっ。」妙子が声を上げたので近くの客が驚いて振り返り、彼女は謝った。

「よかった。」ほっとした様子で青木さんが言った。

「本当にありがとうございます。このご恩は忘れません。」気持ちが高ぶって変なことを言ってしまった、と彼女は思い、冷静になろうと深呼吸をした。

「パスワードはどうしてわかったのですか。何か特別な勉強をされているとか。」

「いいえ、私には全くわからなかったのです、阪神間総合博物館の春川さんという方に相談して、教えていただきました。」

それから妙子はお札をさせてほしいと頼んだが、青木さんは固辞した。

ファイルには、携帯電話の番号だけが書かれていた。

電器店を出たところで一度電話をかけようとして、やはり落ち着いた場所がいいと思い直し、タクシーで家に帰った。

帰宅してからずいぶん長い間、妙子はリビングの机の上に置いたノートパソコンの白鳥の絵を眺めていた。やっと願いがかなったというのに、心の中にもやもやしたものがあって、電話をかけるのがためらわれた。

彼女はバッグを持って街に出た。通いなれた道を歩いていると、店先に並んだ野菜や、クリーニング店の看板、定食屋ののれんなど、目にしたいろいろなものに青年と暮らした日々の記憶が呼び起こされて、頭の中を駆け巡った。

小さな商店街を抜けて、少しひなびた駅に着いたときには、ちょうど跨線橋の向こうで電車が出発するところで、十分待って次の電車に乗った。

扉が閉まり、電車が動き始める。モーター音の高まりとともに、景色が後ろに流れていく。

「私には、会うべき人がいます。」妙子は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

(七)

仕事が早く終わった日は、その喫茶店に行くのが光彦の習慣だった。やさしい光があふれる店内にシンプルで落ち着いた調度品、小さめの甘酸っぱいケーキと、マイルドですっきりした味わいのコーヒー。すべてがお気に入りだ。どんなに気疲れしていても、ここに座ると解放される。

「ご相席、よろしいでしょうか。」

他のテーブルが空いているのになぜ、と思ったそのとき、前の席に眼鏡をかけた女性が座った。

「は、春川さん。どうして。」

「さっき、あなたがここに入られるのを見かけたんです。しばらく来てくださらないから、お話ししたいな、と思って。ご迷惑でしたか。」

「とんでもない。とても嬉しいです。」嘘ではなかったが、なぜか動揺していた。

「社長に就任されたんですね。おめでとうございます。」

「ありがとうございます。実は、僕のような未熟者が百人以上もの社員の生活を預かる立場になっていいものかどうか、他にもっと適任の人がいるのではないか、と思い悩んで、しばらく身を隠していたのですが、みんなの気持ちを知って決心がつかしました。」

「そうだったんですか。大変なこともあるかもしれませんが、応援しています。」

「がんばります。」

春川さんはラズベリーソーダを注文すると、少し身を乗り出して言った。

「不思議なご相談をお受けしたんです。ある女性の同居人の方が突然出て行ってしまつて、その方の残していったノートパソコンに連絡先のファイルがあったのですが、パスワードがかかかって見られません。そのパスワードというのが阪神間の場所で、ノートパソコンの画面に表示されていた詩のような文章がそれを示しているらしいので、調べてほしいということでした。」

「その人が、春川さんに相談したのですか。」

「いいえ。彼女が相談したのは電器店の店員さんです。その店員さんが、私のところへ来られました。」

「それで、どうなったのですか。」

「幸い、予想したパスワードが正解で、連絡先がわかったそうです。彼女は直接、博物館にお礼を言いに来てくださいました。」

「それはよかった。」

「正直に言ってください。」春川さんが、少し怖い目をして言った。

「えっ。」

「彼女、いえ安原妙子さんが探していた人は、あなたですよね。」

光彦は、手にしたコーヒーカーップを落としそうになった。

「そんな。妙子さんが博物館に行ったときには、まだ僕がどこの誰なのか知らなかったはず……。」しまった。これでは自白したようなものだ。

「すみません。その通りです。でも、どうしてわかったのですか。」

「あなたがネットで社長就任を報告したときの写真、後ろに写っているのは、西野雨水ポンプ場です。」

「あっ……。」光彦は一瞬絶句した。

「そこに立てば三つの泉のパワーがもらえるように思って縁起を担いだのですが、まさかそんなことで……。」

「それより、妙子さんとは会えたのですね。」

「はい。電話をもらったので、すぐに彼女の家に行って、僕の本名やこれまでの事情を話して謝りました。自分が姿を消してからのことも聞きました。」

「よかった。でも、どうして突然いなくなったりしたんですか。」

「彼女が車道で転んで助けに行ったのが、出会ったきっかけだったんです。それで僕のことを命の恩人だと勘違いして、無理に合わせてくれているのではないかと疑問がわいてきて、このまま交際しても彼女を不幸にしてしまうと思うようになり、身を引くことにしました。」

「それなら、なぜあのノートパソコンを置いていったのです。」

「それが、どうしても未練が残っていたので、もしかだご縁があるのなら、妙子さんが博物館に相談に行つてあの謎を解いてくれるのではないかと、望みをかけました。」

春川さんは、ため息をついた。

「謎かけで人の気持ちを試そうとするなんて、よくないと思います。」

「決してふざけてやったわけではありません。僕が妙子さんの求める存在であるときにだけ連絡してもらえる方法を、必死に考えたんです。」

「博物館で何度もお会いしていますから、あなたが誠実な人だということは知っています。でも、素直に話し合えば解決できたのではありませんか。自分勝手な思いやりは、相手を傷つけることもあります。」

「僕の考えが浅かったと思います。彼女につらい思いをさせてしまつて、反省しています。」

光彦は頭を下げた。

「お待ちせしました。」春川さんが注文したラズベリーソーダが運ばれてきた。彼女は「あ

りがとう。」と言って受け取った。

「妙子さんが博物館に来たとき、自分は連絡先を見るためのパスワードしか知らない、あの文章の意味を知りたい、と言われていたので、館内を案内しながらご説明しました。夢中になって聞いてくれて、私も嬉しかったです。」

「そうでしたか。どうりでずいぶん詳しく知っているとと思いました。」

春川さんはラズベリーソーダをひと口飲んで、やさしい笑顔を見せた。

「それで、妙子さんとはこれからどうされるのですか。」

光彦は、少し考えてから答えた。

「もし許してくれるのなら、婚約したいと思っています。」

突然、春川さんが彼の手を握った。

「あなたと妙子さん、お似合いだと思います。幸せにしてあげてください。」

「はい。約束します。」

光彦は春川さんの手を握り返した。そして、彼女が誰かに似ていると思った。そうだ、小学生のときに憧れていた女の先生だ。あのときも好きな子にいたずらして、叱られたんだった。

(三つの泉 了)

II. 日下部文書（くさかべもんじよ）

(一)

日下部家にエアコン工事の見積りに行ったのは、日差しが暖かくなってきたころだった。普通は工事担当の人だけで行くのだが、日本家屋で更新が2台に新設が1台とあって、電源や設置場所の状況によっては機種の変更にしなければならない可能性もあったので、工事担当の山本さんに、店で応対した僕が同行したのだ。

インターホンであいさつをして立派な木の門を通り、よく手入れされた植込みの並ぶ庭を過ぎると、落ち着いた雰囲気の屋敷があった。玄関で日下部さんが出迎えてくれて、中に案内された。最近リフォームしたのか内部は新しくなっていて、洋間もいくつもあった。

山本さんと二人で室内機と室外機の置き場を検討したり、各部分のサイズや状態を調べ

たり、配電盤を確認したりして、作業は20分ほどで終わった。

「ありがとうございます。機種や工事のプランは、先日ご提案した通りで問題ありません。」僕は持ってきた見積書を日下部さんに手渡した。

「日下部さんは、古くからここにあるお宅なのですか。」

帰り際に突然、山本さんが言った。

「かなり昔からここに住んでいるようですが、なぜですか。」

日下部さんは少し困惑した様子で答えた。

「すみません。奈良時代にこのあたり、武庫郡（むこぐん）の長官をしていたのが日下部氏だと、本で読んだことがあるものですから、気になって。」

山本さんは歴史に関心があるようで、昼休みに歴史の本を読んでいるのを何度か見たことがある。

「その話なら私も知っていますが、残念ながら我が家と関係があるのかどうかわかりません。そういえば、うちの一族の始まりについての書物があると聞いたことがあります。ただ、祖父の代にはすでに所在不明になってしまっていたらしく、蔵を探しても見つからなかったそうです。」

「いや、なんとも興味深い話です。博物館にたのんで蔵の中を調査してもらったらいかがでしょうか。」山本さんは、すっかり夢中になってしまっている様子だ。

「そうか、私のような素人が蔵の中をかき回すのは気が引けて、手を付けられないのですが、このままだと何もわからないうちに雨漏りとかでだめになってしまうのではないかと、心配していたところです。ぜひやってみたいと思います。」

初対面の者がこんな提案をして迷惑だろうと思ったのだが、日下部さんも乗り気だった。

「そうだ、青木さん、博物館に知り合いの人がいるんでしょう。聞いてみてくださいよ。」
やっぱりこっちに話が回ってきた。

「知り合いと言つても一度相談に乗っていただいただけで、親しいわけではありません。そんな調査をしているのかどうかもわかりません。」

そう答えたものの、せっかくお客様が前向きなのに、こちらから断るわけにもいかない。最低限の情報だけはお聞きして帰ることにした。

日下部家はお祖父さんの代からは会社に勤めているが、それ以前は木材加工関係の事業で、かなりの資産を築いていたらしい。蔵は百年ほど前に建てられたもので、もつと古い時代の文書なども収納されているとのこと。税務署の調査を受けたことはあるが、貨幣や美術品のような高価なものは見つからなかったようだ。

(二)

二度目に訪れた博物館は、少し心にゆとりができたせいか、落ち着いた雰囲気にも思えた。前回の相談の後、春川さんに電話ではお礼を言ったのだが、やはり直接会って言いたいと思ひ、受付の人にお願ひして呼び出してもらった。

「こんにちは。」

僕を見つけた春川さんの笑顔が懐かしいような気がした。

「先日はありがとうございます。おかげで助かりました。」

「お役に立ててよかったです。また何かあったら、おっしゃってください。」

「それが早速で申し訳ないんですが、電器店のお客様の話でまた相談があります。古い蔵に百年以上前の文書が大量に収納されていて、その家の人にも読むことができず、内容がよくわからないということです。その家の始まりについての書物もあったらしいのですが、行方不明になってしまっているそうです。調べていただくことはできるでしょうか。」

春川さんの目が輝いたような気がした。

「それは貴重な資料かもしれませんが。ぜひ一度見せていただきたいと思います。その方にご連絡してもよろしいでしょうか。」

訪問した時に承諾をもらっていたので、僕は日下部さんの名前と住所、連絡先を書いた紙を渡した。

「日下部さんって、歴史のありそうなお名前ですね。ご住所が西宮市ですが、2006年、阪急西宮ガーデンズの開発に伴う発掘調査で、奈良時代の井戸から日下部氏の名前が書かれた木の荷札らしいものが見つかっています。」

調査は西宮市立郷土資料館と調整して話を進めます。もちろん、結果が出たらご報告します。」

「ありがとうございます。よろしく願います。それから、気になっていたことがあるんですが。」

「なんででしょう。」

「なぜ日と下で『くさか』と読むんでしょうか。」

「それは昔から多くの人が疑問に思ってきたところですが、よくわかっていません。千三百年前に書かれた古事記の序文にも、『日と下でくさかと読むようなことは、もとからそうしているのです、そのままにしておく』と書いてありますから、当時から不思議な読み方だと思われていたようです。

日下という言葉は、現在の東大阪市日下町のあたりを示す地名だったと言われています。同じように漢字と一般的な読みが一致しない地名としては、飛ぶ鳥と書いてあすか、春の日と書いてかすが、などがあります。

有名なのはこれらの表記が本来は枕詞（まくらことば）だった、という説です。つまり、

日下（ひのもと）の『くさか』

飛鳥（とぶとり）の『あすか』

春日（はるのひ）の『かすが』

と言っていたのが、枕詞だけを書いてその地名を表すようになったというものです。

ただ、『日下の』については、実際に枕詞として使われていた例が見当たりません。そこで『草の下』と書いて『くさか』と言っていたのが、『草』の字の上と下を省略して『日』と書くようになった、という説もあります。

いずれにしても、これらの土地が古代の政権にとって神聖な場所だったことと関係があるのではないかと思えます。古代には『言霊（ことだま）』と言って、言葉の持つ霊的な力が重視されていました。地名の言霊を守るために、その地名を直接指し示すような表記を避けたということも考えられます。」

「ありがとうございます。あともう一つ知りたいのですが、日下部さんの『日下部』とはどういう意味でしょうか。」

『日下部』は、仁徳天皇の子で、日下の地に住んでいた兄の大日下王（おおくさかのみこ）、妹の若日下王（わかくさかのみこ）に仕えていた人たちだとされています。もしかし

たら、日下部さんは、その子孫なのかも知れませんね。」

(三)

調査員が事前に日下部家を訪問して聞き取りや現地確認を行なった後、蔵の調査が実施された。蔵の中の文書は現状記録を経て博物館に運ばれ、慎重に整理された。これから撮影や解読などの作業が進められる。

文書の中には、近世の阪神地域の産業の様子を伝える、貴重な資料が多く含まれていたそうだ。ただ、日下部さんが言っていた「一族の始まりについての書物」は見つかっていないらしい。

春川さんからそんな連絡をもらった頃、日下部さんのお宅にテレビを配送する予定があつて同行した。日下部さんは僕を見かけると、自分からあいさつしてくれた。

「先日は博物館に紹介していただいて、ありがとうございます。長い間気になりながら放置していたのですが、すつきりしました。」

「いいえ、こちらこそ勝手な申し出にに応じていただいて、ありがとうございます。ただ、『一族の始まりについての書物』が見つからないのは残念です。もともとその話でお声がけしたのに、申し訳ありません。」

「お気になさらないください。もう失われてしまったのかもしれないし、最初からそんなものはなかったのかもしれない。」

納品したテレビは65インチのものだったが、大きな家なので問題なく設置できた。物置にある古いテレビを回収して帰ることになっている。

日下部さんは、庭のはずれにある物置の扉を開けた。物置と言ってもかなり立派なものだ。中には大工道具や子供のおもちゃなども収納されていた。古いテレビを運び出した後、僕は、横の棚に積まれている雑誌の表紙に、カメラが大きく載っているのに気づいた。

「写真がご趣味なんですね。」

「昔はいろいろなことに手を出したのですが、どれも本格的にはできませんでした。いつかは読むだろうと思っていろいろうちに大量にたまってしまったので、処分するつもりで、母屋を片づけたときにここに移しました。」

なるほど、写真の他にも鉄道模型や切手収集から古武術まで、様々なジャンルの雑誌が混在している。ふと、少し下の方で、背表紙に「ハイスピードカメラ」とあるものが目に留まった。かなり前の雑誌のようだが、いったいどんな製品を紹介しているのだろうか。

「すみません、この雑誌を見せていただいてもいいでしょうか。」

「どうぞ。よかつたら差し上げます。」

「ありがとうございます。」

僕がその雑誌を引き出そうとしたとき、上に載っていた大量の雑誌がバランスを崩して、ザーツと散乱した。そして、雑誌と一緒に積み重ねられていた紙包みが劣化していたらしく、破れてしまった。

「申し訳ありません。」

「大丈夫。どうせ処分するものですから。」

慌てる僕を手伝って片付けをしていた日下部さんが、突然「あつ」と声を上げた。

「この包みは不用品だろうと思って中を見ていなかったのですが、何か古い書物が入っています。」

僕は配送担当の人と別れてその書物を博物館に持って行ったのだが、春川さんが不在だったので最初から説明することになり、職場に戻るのが遅れてしまった。

(四)

書物の内容が分かったという知らせを受けて、僕は博物館に向かった。着いたときには、春川さんは受付で待っていてくれた。

「おめでとうございます。届けていただいた書物は、日下部家の始まりについて書かれたものでした。」

「すごい。どうもありがとうございます。」

「いいえ、こちらこそ感謝しています。ただ …。」

「何かあったのですか。」

「あれが書かれたのは江戸時代。つまり、日下部家が発展した後の時代です。」

「古い時代の文献の写し、ということはありませんか。」

「確かに千数百年前の話ということになってはいるのですが、文体などから見て、古代の文献をそのまま書き写したとは考えられません。もちろん、古い伝承をもとにして書かれたものだとは思いますが。」

「そうだったんですか。」

「でも、日下部さんは『いつの時代のものであっても、探していた書物であることはまちがいない。家宝にしたい。』とたいそうお喜びでした。」

「それはよかった。僕も嬉しいです。」

「私もです。」

「それで、内容はどんなものだったのでしょうか。」

「少しお時間をいただいでよろしければ、お話しします。」

春川さんは僕を相談室に案内すると、「日下部家の始まりの話」を聞かせてくれた。

(五)

昔、雄略天皇の治世のことです。丹後の国に、浦島太郎という若者が漁をして暮らして
いました。

ある日のこと、貝や海藻などを探して浜辺を歩いていた太郎は、砂浜に何か動くものがあるのを見つけました。近づいてみると大きな亀が砂の上で裏返しになって、手足をばたつかせています。

「これはどうしたことか。捕えて帰るには少し大きすぎるが、このまま見捨てていくのも気が引ける。ここは一つ、助けてやるとしよう。」

太郎は亀を持ち上げて、もとに戻してやりました。

次の日、太郎は釣りのために一人で小舟を出しましたが、島から島へと渡り、いくつもの入江をまわって釣り糸を垂れても、一匹の魚も釣れません。なんとか魚を得たいと思った太郎が沖に出てしばらくすると、突然大きな波が来て、海に放り出されてしまいました。

(六)

気がついたとき、太郎は見知らぬ海岸に倒れていました。

そこには目の覚めるような朱塗りの柱が無数に立ち並び、金銀に輝く数々の装飾に彩られた、豪華な宮殿が建っていました。太郎が驚いて宮殿を見ていると、ゆっくりと扉が開いて、何人もの童子を連れた美しい姫君が姿を現しました。

「ようこそおいでくださいました。ここは竜宮。私は竜神の娘、乙姫と申します。この

度は、大切な亀を助けていただいて本当にありがとうございました。ぜひお礼をさせてください。」

乙姫に案内されて宮殿に入ると、これは不思議、もう秋のはずなのに、はてしなく広い庭では梅や桜の花が咲き乱れ、柳の細い枝は糸のように風になびき、どこからか、うぐいすの声も聞こえてきます。「ここは春の庭。竜宮には、春夏秋冬をめぐる四季の庭があるのです。」と乙姫は言いました。

二つ目の庭は夏らしく、卯の花の垣根を過ぎると、池には露を乗せた蓮の花が咲き、涼しげにさざなみの立つ水際には遊ぶ水鳥、木々の梢には緑の葉が茂り、せみの声が響く青空を、ほととぎすが鳴きながら渡っていきます。

三つ目の庭は、見渡す限りの秋景色。木々の葉はあざやかな赤や黄色に染まり、垣根には菊の花、霧がたちこめる野原には、萩をかきわけて歩みながら鳴く、物悲しげな鹿の声

が聞こえます。

四つ目の庭では、山々は真つ白な雪に埋もれてしまつて、木々もみな葉を落とし、枯葉の上には初霜が降り、谷の入り口のところから、かすかに炭焼きの煙が立ち上っています。

やがて色とりどりの宝玉で飾られた広間に着くと、多くの人たちが集まつていて、にぎやかな宴が始まりました。太郎は乙姫に勧められるままに、見たこともないようなごちそうを味わい、美しい娘たちの歌や音曲を聞き、華やかな舞を見て、大いに宴を楽しみました。

竜宮で見るのは、全てがめずらしいものばかり。乙姫との楽しいお話はつきることなく、夢のような三日間を過ごした太郎でしたが、だんだん故郷の家族のことが気になってきました。太郎は、思い切つて乙姫にたずねました。

「乙姫さま、私は家族に何も告げることなく、遠くはなれて来てしまいました。私には

よくできた弟がおりますから、父母も大丈夫とは思いますが、私のことを心配しているかもしれません。なんとか故郷に帰ることはできないでしょうか。」

すると、乙姫はとても悲しい顔になって、しばらく考えてから答えました。

「あなたとお会いしてから、本当に幸せでございました。できることなら、私といつまでも竜宮でお暮らしいただきたいと思っておりますが、ご家族へのお気持ちはよくわかります。もとのところにお送りいたしましたでしょう。」

乙姫は美しい化粧箱を太郎に渡しました。

「これは玉手箱といって、私が大切にしているものです。もし竜宮に帰ってきたいと思われるのであれば、決してふたを開けないでください。」

「わかりました。決して開けませんとも。」と、太郎は答えました。

出発のとき、乙姫は「お別れがらくてお見送りができません。」と姿を見せませんでし

た。浜辺には、一匹の大きな亀が待っていました。竜宮の人たちが

「これは、あなたに助けていただいた亀です。この亀に乗ってお帰りください。」
と言ったので、太郎は亀の背中に乗って海を越え、故郷の浜に帰ってきました。

(七)

ところが、太郎が村にもどると、いつの間にか田畑は荒れはて、全く違う景色になってしまっていました。ようやく住んでいたところに帰り着きましたが、そこにも見慣れた家はなく、古い小屋が立っています。小屋の前で呼ぶと一人の老人が出てきたので、太郎はたずねました。

「ここに住んでいた浦島太郎という者ですが、私の家が見当たりません。何かご存じで

はないでしょうか。」

「はて、浦島太郎と言えば、私の先祖の兄弟に、そのような名前の人がいたと聞いたことがありますが、もう三百年も前の話です。その人は若いときに海で亡くなったとのこと。あなたは、いったいどのようなご関係でしょうか。」

老人はそう答えると、少し離れた森を指さして言いました。

「ほら、あの森の中に、浦島太郎のお墓がありますよ。」

太郎はたいへん驚いて声を失ったまま立ちつくしてしまいましたが、少し落ち着いてから、老人にこれまでのことを話しました。

「なんとも不思議なことじゃ。それなら、あなたは私の親族です。おもてなしをしてあげたいところですが、この村では、長い間の日照りで田畑に引く水が足りず、食べ物が残り少ないのです。」老人は申し訳なきように言いました。

「あの森の中には、竜神さまの泉があったはずではありませんか。」

太郎がたずねると、老人が言いました。

「その泉でしたら、昔は一年中水がわき出して、田畑を潤していたのですが、私が生まれたころには、もう枯れておりました。」

太郎は老人に別れを告げ、ぼうぜんとして歩いて行きました。たった三日留守にした間に、故郷はなぜこんなに変わってしまったのか。自分が三百年も前に死んだという話は本当なのか。それでは、今いる自分はいったい誰なのか。何もかもわからなくなり、いくら村の中を回っても、会う人は知らない顔ばかり。歩き疲れて座り込んだ太郎は、持っていた玉手箱を見ました。「もう行くところも、帰る家もない。この箱を開けたら、何かが変わるかもしれない。」一瞬の心の迷いに操られ、乙姫との約束を思い出す間もなく玉手箱を開けると、白と紫の煙が立ちのぼり、あつという間に、太郎は真つ白な髪の老人になりました。それから「しまった。亀のいる浜辺まで戻れば、もう一度竜宮に行けたかも知れ

ないのに。」と後悔しましたが、もう遅かったのです。

それでも浜辺に向かった太郎は、途中の松の木の下で行き倒れてしまいました。その時、太郎は自分の姿が一羽の鶴に変わっていくのを見たのです。そして、いつか「人が死ぬときには、その魂は鳥になって飛び去るのだ。」と聞いたことを思い出しました。

「私の命もここまでのようだ。自分で招いたこととはいえ、惜しいことをしたものだ。ああ、乙姫さまが恋しい。」

鶴は空高く舞い上がり、浜辺まで飛んでいきました。すると、あの亀が砂浜に打ち上げられて、動かなくなっていました。

「私が玉手箱を開けたばかりに、お前まで竜宮に帰れなくなったのか。せっかく助けたものを、この手で殺してしまった。かわいそうなことをした。」

鶴は鳴き声を上げ、涙を流しました。

ところが、その涙が亀にかかった瞬間、まばゆい光が差したかと思うと、光に当たった太郎は、もとの若者の姿になったのでした。

そして目の前に、乙姫が立っていました。

「太郎さま、あなたにお話ししていないことがございました。」

乙姫は静かに語り始めました。

「浜辺で助けていただいた亀は、この私だったのです。次の日、なんとかご恩返しが出来たと思います、太郎さまを探していた私は、海で溺れてしまわれたあなたを見つけました。今度は私がお助けしようと、私の魂の入れ物であった玉手箱にあなたの魂を共に入れたのですが、あなたはすでに亡くなられた後。すぐに生き返らせることはできず、ようやく竜宮でよみがえっていただいた時には、三百年もの歳月が流れておりました。」

「乙姫さま、そのような温情をおかけいただいたのなら、どうして教えてくださらなかつたのですか。」

「あなたがこのことを知れば、あなたの魂は玉手箱を出て行ってしまいます。でも、あなたも私も玉手箱から遠く離れることはできません。それで、あなたにはお話ししないまま玉手箱をお渡しして、再び亀の姿になってお供してきたのです。」

乙姫のまごころを知った太郎は、自分がひどいことをしたと思いました。

「ああ、かなわぬ望みとあきらめておりましたのに、乙姫さまにお会いできて、こんなにうれしいことはありません。ですが、私は約束を破って玉手箱を開けてしまいました。」

私が報いを受けるのはしかたありませんが、乙姫さまを道連れにしてしまうとは……。」

「いいえ、太郎さまをこの背中に乗せてお送りして来たときから、もう竜宮にはもどれぬものと覚悟しておりました。この先もご一緒いたします。」

村の広場では、水がなくなつた川に村人たちが集まつて、雨乞いのお祈りをしていました。しかし、いつになつても雨が降る気配はありません。

人々がつらい気持ちで空を仰いだそのとき、五色に光り輝く鶴と亀が現れて、皆の前に降り立ちました。そして、神々しい貴公子と姫君に姿を変えると、おどろく村人たちを後に、森に入つていきました。

「水だ。」と誰かが叫びました。川に水が流れ出していたのです。みるみるうちに水は田畑に行きわたり、村は歓声に包まれました。

水の源を探して森の中に入った村人たちは、泉からこんこんと水がわいているのを見つ

けました。

「ありがたや。あの方たちは、明神さまにちがいない。」

その後、あの老人から話を聞いた村人たちは、浦島太郎と乙姫を夫婦の明神として信仰するようになったのでした。

数年後、お参りに来た村人の夫婦が、鶴と亀の描かれた布にくるまれた、男の赤ん坊を見つけました。その子は、明神さまに授かった子供として夫婦の家で大切に育てられ、成人するとみごとに立身出世を遂げました。

私たちの一族は、こうして始まったのです。

(日下部文書 了)

Ⅲ・羽衣の桜

(一)

「失礼いたします。」

冷たいドアを開けて部屋に入ると、大きな椅子に腰かけた男が、のけぞった姿勢でスマートフォンをいじっていた。

「ちよつとこつちに来て。」男は自分の机の前を指さした。

「羽衣の桜とかいうの、見つかったんだっけ？ 『存在が確認できたら地域振興にもつながります。』、なんて君の夢物語を前任が気に入っちゃって派遣することになったみたいだけど、もう三年目に突入だ。いったいどんな成果が上がってるっていうの？ 君がいたことで地域振興にどれだけ貢献できたのか、説明してくれるかな。」

「申し訳ありません。羽衣の桜に関しては、まだご報告できる成果はありません。」

みそのは小さな声で答えた。この人は苦手だ。別に羽衣の桜を探すために派遣されたわけではない。反論しようと思うのだが、この口調で責められると頭が真っ白になって、言葉が出てこない。

「あのさあ、君、学芸員の資格を持つって言っても、本当は事務職で採用されてるんだよ。僕が新しい事業を計画してるの、知ってるだろ。こっちも人手が足りないんだ。」

「それは承知しています。」

あなたのせいで人手が足りなくなっているんでしょう、とは言えない。

「この春に羽衣の桜が見つからなかったら、6月の異動で本庁に戻ってもらうよ。」

ついに言われてしまった。あと1年、チャンスがあると思っていたのに。

「といっても、明日から4月だ。桜はすぐに散ってしまうんじゃないか。まあ、異動のつもりで準備しといてよ、春川さん。」

(二)

晴れた休日、僕はまた博物館を訪れた。エントランスホールに入ると、そこにはやわらかな春の日差しがあふれ、中庭では様々な花が咲いて、数匹の蝶が訪れていた。初めて見た時からこの庭の風景に魅かれていた僕は、街なかで春の気配を感じるようになって、来たいという衝動を抑えられなかったのだ。

中庭に面した椅子には薄紅色の服を着た若い女性が先に座っていて、自分もそこで座ってもいいものかどうか、少しのあいだ迷ったのだが、ほどなく彼女は立ち上がった。そのとき、彼女が席の横のテーブルに置いていた小さな赤いバッグから、何かがテーブルに落

ちるのが見えた。急いで行ってみると身分証のようなカードで、名前の欄には「若宮さくら」と書いてあった。僕は歩いていく彼女を追いかけた。

「すみません。これ、落としませんでしたか。」

彼女が振り向くと、少し伸ばした髪がふわりと広がって、さわやかな香りがした。

「あつ、本当だ。ありがとうございます。」

カードを受け取った彼女が顔を上げた瞬間、閃光のような快感が走った。

今のは何だったんだろうか。いや、彼女が魅力的だったから、心を揺さぶられただけだろう。僕はそういう奴だ。

彼女はお辞儀をすると、展示室に入ってしまった。

それから僕は椅子に座って中庭の景色を見ていた。ここに來るときに期待していたのは違って少し落ち着かないような、それでも決して悪くはない時間が流れていった。

(三)

「青木さん、こんにちは。」

声をかけられて、僕は身震いしてしまった。こんな時に春川さんに会うとは思っていなかったから。

「すみません。驚かせてしまいましたか。」

「違うんです。中庭の景色がすばらしかったので、なんだかぼーつとしていて。」

おい、いったい何と違うんだ。僕の言ってることが変だ。

「この庭は四季折々の風景を楽しむことができますようになっていきます。今は桜がきれいでしょう。」

「は、はい。とてもきれいでした。」

「一つご相談したいことがあるんですが。」

春川さんが隣に座って言った。

「なんででしょうか。」

「実は、『羽衣の桜』という桜の木を探しているのですが、何かご存じではないでしょうか。」

「『羽衣の桜』ですか。すみません。聞いたことはありません。それは、どんなものなんでしょうか。」

「この博物館では、第二次世界大戦で亡くなられた、ある研究者を紹介する展示を計画しています。数年前、地域の自然や文化について詳しく記録した大量の手記が発見されて、重要な資料の一つになっているのです。その中にこんな文章がありました。『我、羽衣ノ桜

ヲ見タリ。平和ナ世ナレバ、地域ノ産業ニ大イニ貢献スルモノナリ。』

戦争が始まってからの手記は断片的にしか残っていないくて、『羽衣の桜』についての資料はこれだけなのですが、その方は近郊の山をめぐって生き物の調査をしていたので、近郊の山のどこかにあった桜だと思えます。『地域の産業に貢献』という記述からも重要性が高いと考えて探しています。」

「近くの山にあるのなら、探せば見つかりそうな気もしますが……。」

「これまで2回、桜の花が咲く頃に、地域一帯の山林の現地調査をしました。先日はドローンを飛ばして上空からも探しました。でも、『羽衣の桜』という名前だけで、その姿がわかっていないので、確認の作業が進んでいません。この近郊の山々には、多くの桜があります。もしかしたら、もう羽衣の桜を見ているのに、それだと気づいていないのかも知れません。」

「わかりました。何か情報があつたらお知らせします。」

「変なお願いをして申し訳ありません。」

春川さんはお辞儀をして立ち去った。

僕は椅子に座ったまま、中庭の空を見上げた。なんとかして彼女の力になりたい。そう思ったのだが、何の考えも浮かばなかった。

(四)

「二年……か。」

夜の執務室。みそのは両手で頬杖をつきながらつぶやいた。

この博物館に派遣が決まった時は、新しい人生の扉が開くような気がして、未来への希

望に胸をときめかせたんだった。それを最近のここのように思い出すと、また空しい気持ちになる。

ここに来てから、いろいろなことに夢中で取り組んできたのに、大きな成果が上がったとは言えない。本庁に戻ったら、もう派遣されるのは難しいだろう。

このあいだ訪ねてきた若宮さんという人のことも気になっている。彼女は「ここは私にとって大切な場所なんです。」と言っていたけれど、それは私も同じだから。

ああ、できることなら、羽衣の桜を探し出して、これからもこの博物館で働きたい。どこかに手がかりはないだろうか。でも、関係のない青木さんにまで相談したのは、非常識だったかもしれない。あの人、なんでも相談されると必死になってしまうみたいだし、無理してはいないといんだけど。

あれから一週間、僕は羽衣の桜のことを考え続けていた。

博物館の事業で探しているのだ。文献とか、ネットとか、公的機関などにある情報は調べつくしているだろう。山林の現地調査もやっている。僕にいったい何ができるといえるのか。

そういえば子供のころ、お花見と言えば西宮にある夙川（しゆくがわ）公園だった。それはとても楽しみなイベントだったはずなのだが、今になって思い出されるのは、行くときに乗った阪急電車の駅の様子ばかり。肝心のお花見がどんな風だったのか、ほとんど記憶がない。とはいえ、桜のことをいくら考えても、それ以外に何も思いつかないので、僕は夙川公園に出かけてみることにした。

夙川駅は、多くの人で賑わっていた。夙川の河川敷に整備された夙川公園には約3kmにわたって千数百本の桜が植えられているようだ。駅の改札口は川の下流にあたる南側にあるが、お花見は川の上流の方に行っていたような気がする。改札口を出て夙川の西から東へと橋を渡り、線路の下を抜けて駅の北側へ行くと、堤防を登る階段があった。

夙川公園にはたくさん松の木があって、桜の木よりも大きいので、実際にはこちらの方が目立っている。松葉の濃い緑色や、立派な幹の黒っぽい色は桜の花の色とのコントラストがいい。桜は花の盛りを過ぎていたが、川面に舞い散る花びらがまた美しい。公園のあちこちにはブランコやすべり台、ジャングルジム、シーソーなど、カラフルな色の遊具があつて、子供たちが歓声を上げながら遊んでいる。

夙川駅から上流側に向かう支線の一つ先にある苦楽園口駅を過ぎてしばらく行くと、河川敷に芝地の広がる場所について。小さなダムのような堰堤がいくつもあつて、川の勾配が少し急になってきたのを感じさせる。川遊びやボール遊びをしている人たちがいる。い

い風景だったが、桜が多いのはこのあたりまでのようなので、引き返すことにした。

夙川駅からの行き返り、お花見は楽しめたが、羽衣の桜についての情報は何も得られなかった。まあ、最初から期待できるあてもなかったのだから仕方ない。僕は切符を買って改札口を入った。

電車を待つあいだ、正面にあった駅の周辺の案内図を見ていたら、思いがけないことに気がついた。この駅のすぐ南の地域は「羽衣町」というのだ。なんとという運命的な出会いだろう。これは見に行かないわけにいかない、と思った僕は駅員さんをお願いして、駅から出させてもらった。

駅の南側には「夙川グリーンタウン」というショッピングセンターが建っていて、お花見の後で立ち寄った記憶があった。入ってみると昔より落ち着いた雰囲気になっていたが、小路を思わせる通路に個店が並んでいて、懐かしい感じがした。

さらに南へ行くと片鉾池（かたほこいけ）という池があつて、周りは桜のきれいな公園

になっていた。池の上に建てられた公民館のひさしには、サギが何羽もとまっていた。池の中ほどでは噴水がザーザーと音を立てながら、円錐を逆さに立てたような形に、霧状の水滴を噴き上げている。

その先はもうJRの線路。西に進路を変えて少し歩くと、すぐに隣の「霞町（かすみちよう）」に接していたので、今度は北に向かって歩き、羽衣町を一周した。品の良い邸宅が並ぶ住宅地が続いていたが、やはり羽衣の桜につながるようなものは見当たらない。

駅に戻る途中で、生垣の続く日本家屋があった。近頃はあまり目にしないが、最近同じような生垣を見た記憶がある。先日訪問した日下部さんのお宅にあったものだ。

そのとき、日下部さんなら羽衣の桜について何か知っているような気がした。そういえば、日下部家の倉庫で見た写真雑誌の中に「桜の絶景」という特集記事があったと思う。まあ、それは関係ないか。

(六)

その日の夜、僕は日下部さんに電話した。先日、店にあいさつに来られて話をしたばかりだ。

「夜分に申し訳ありません。『羽衣の桜』という桜をご存じないかと思つて電話させていただけいたのですが。」

「羽衣の桜ですか。すみません。私も桜が好きで、毎年春になると写真を撮りに行っているのですが、そんな桜は知りません。」日下部さんは残念そうに答えた。

「そうですか。お手間を取らせてすみませんでした。」

「そうだ。ちょうど一週間後の水曜日に、なじみの植木屋さんが来られます。あの方ならご存じかもしれません。聞いておいてあげましょう。」

「あの、ご迷惑でなければ、直接お会いしてお聞きしてもよろしいでしょうか。」

「いいですよ。朝8時ごろに来られる予定ですから、作業の前にお話しされてはいいか
でしょうか。」

「ありがとうございます。」

一週間後の朝、僕は日下部家を訪問した。日下部さんは門のところで待っていてくれた。

「おはようございます。朝からお邪魔して申し訳ありません。」

「いいえ、お安い御用です。」

日下部さんと庭へ行くと、作業服を着た植木屋さんが、道具を並べて準備をしているところだった。

「さっきお話しした電器店の方が来られました。よろしくお願いします。」

日下部さんが声をかけ、植木屋さんは作業を止めてお辞儀をした。

「お仕事中にすみません。こちらでお世話になっている電器店の青木と言います。」
僕があいさつをしたとたん、植木屋さんの方から話し始めた。

「ああ、お聞きしましたよ。『羽衣の桜』って、天女がいた山に残していったとかいいう桜
でしょう。私もそれだけしか知りません。」

植木屋さんの話は一言で終わってしまったが、情報をもたらえたのは収穫だ。僕は植木屋さんと日下部さんにお礼を言っ、博物館に向かった。今聞いたことを、早く春川さんに知らせようと思ったのだ。

だが、途中で街路樹の桜の花がすっかり散ってしまったのを見た僕は、急に不安になった。もしかしたら、もう遅かったんじゃないだろうか。先週に電話した時、日下部さんにあの植木屋さんの連絡先を教えてもらって、直接聞いておけばよかった。そんな考えが、今ごろになって頭に浮かんだ。

(七)

博物館に来たのは何回目だろうか。いつの間にか、ここは僕にとって元氣をもらえる場所になっている。

受付に出てきた春川さんは少し疲れているような気もしたが、いつものように笑顔を見せてくれた。

「羽衣の桜のこと、日下部さんのお宅に来ていた植木屋さんにお聞きしました。」

「わざわざ聞いてくださっただけですか。ありがとうございます。」

彼女は胸の前で手を合わせた。

「羽衣の桜は、天女がいた山に残っていた桜なんだそうです。すみません。それだけしかわかりませんでした。」

「天女がいた山？ …… ああつ。」

春川さんは声を上げたところで我に返ったらしく、両手で口を覆って顔を赤くした。

「なんで気がつかなかったんだろう。羽衣の桜の『羽衣』って、見た目のことだとしか思っていませんでした。」

彼女は急いでタブレット端末を持ってくると、それに話しかけた。

「レトリバー、稲倉山の桜の分布確率図と、これまでの調査結果を出してください。桜の種類別でお願い。」

「ラジャー。」女の人の声が答えた。レトリバーって、しゃべれたのか。

「あの、『稲倉山』という山は？」

「『風土記（ふどき）』ってご存じでしょうか？」

「名前は聞いたことがあります、よく知りません。」

「風土記は、各地方の地名の由来や自然、産物、言い伝えなどについてまとめた文献で

す。特に有名なのは、奈良時代に作成された一番古い風土記ですが、常陸（ひたち）、出雲（いずも）、播磨（はりま）、豊後（ぶんご）、肥前（ひぜん）の五国以外の風土記は写しも残っており、一部分だけが逸文（いつぶん）という、後世の書物に引用された文章で伝わっています。このあたり、大阪府の北西部から兵庫県の南東部にかけての地域は、昔は摂津国（せっつのくに）と呼ばれていたのですが、摂津国風土記逸文によると、稲倉山は『とよかのめの神』がいて、ご飯を盛った山だということです。」

『』とよかのめの神』ですか？」

「とよかのめの神は、伊勢神宮の外宮（げくう）に祭られている『豊受大神（とよけのおおかみ）』と同じ神様だとされています。そして、丹後国風土記逸文には、比治真名井（ひじのまない）という泉に舞い降りた八人の天女のうちの一人がこの神様になられた、というお話があります。」

「ということは、『天女がいた山』というのは…。」

「稲倉山のことだと思えます。」

春川さんは少しのあいだ思案していたが、突然僕に言った。

「青木さん、もしよかつたら、つきあっていただけませんかでしょうか？」

「ええつ。」僕がすごく驚いたので、彼女も慌てた表情になった。

「す、すみません。私と交際してください、ということではなくて、今日の午後、一緒に稲倉山に行っていただけではないでしょうか。今日は他にスケジュールの空いているスタッフがいけません。稲倉山は宝塚市内にある山で、そんなに遠いところではないのですが、一人で山に入るのは、ちよつと怖いので……。」

本当にびっくりした。一瞬、大きな希望を抱いてしまったが、頼ってもらえるだけでも光栄だ。ただ一つ、気になることがあった。

「ここに来る途中で街路樹の桜を見たのですが、花はみんな散ってしまっていました。」

これから桜を探すのは難しいのではないですか。」

「そうかもしれないませんが、このチャンスにかけてみたいんです。ご無理でなければ、お願いします。」

もちろん行くしかない。いや、ぜひ行きたい。

「わかりました。行かせていただきます。」僕は答えた。

「ありがとうございます。本当に助かります。」

春川さんが両手を僕の右腕に添えて言った。腕から胸に快感が走った。

(八)

路線バスには多くの人が乗っていたが、山に近づいていくにつれ、バス停ごとに降りる

人がいて、だんだんと減っていった。隣の席に座った春川さんは、少しそわそわした様子で左右の窓の景色を眺めている。彼女の視線がこちらに向けられる度に、僕は緊張して姿勢を正した。

住宅街の中にあるバス停で、彼女と僕はバスを降りた。趣向をこらした邸宅が立ち並ぶ坂道を登っていくと、目の前に新緑の山々が姿を見せた。この季節の山は、明るい緑、濃い緑、少し赤いものと、様々な色の木々が入り混じっていて、とても華やかに感じる。遠くから鳥のさえずりが聞こえてくる。

春川さんは早足で少し前を進んでいる。僕は彼女のリュックが揺れるのを見ながら、この状況を実感できないままですべていく。

春川さんが「一人で山に入るのが怖い」と言った時のことが、何度も思い返された。それなら、部外者の僕と二人で山に入るのは怖くないだろうか。もしかしたら、意外にも彼女は「脇が甘い人」なのでは？ いや、悪い方に考えてはいけない。彼女は僕を信用し

て同行を依頼してくれたのだ。素直に喜ぼう。

やがてアスファルトの道は途切れて、栗色の山道が尾根の方向へ続いていた。

時折すれ違ふハイキングの人たちとあいさつを交わし、赤茶けた岩盤が露出した少し険しい道を過ぎると尾根筋に出た。左に曲がってしばらく行ったところで、彼女はリュックからタブレットを取り出して、地図や現在位置を調べてから言った。

「この先は道はずれます。ここで待っていてください。」

「僕も行きます。」

「だめ。二人とも遭難してしまつたら、助けが呼べません。それに、このあたりにはヤマカガシという毒のある蛇がいます。普通の服装で藪に入るのは危険です。」

せっかく一緒に来たのに離れてしまうのは残念だったが、わがままを言ったら迷惑をかけることになりそうなので、おとなしく待つことにした。

「わかりました。気をつけて行ってきてください。」

「ありがとうございます。」

春川さんは、ゆっくりと木々の中に消えていった。

どのくらい待ただろうか。いつの間にか鳥の声もしなくなつて、あたりは静寂に包まれていた。彼女がこのまま戻つてこないのではないか、そんな不安が首をもたげてきたとき、がさがさと音がして、頭や肩にたくさんの枯葉をつけた春川さんが出てきた。

「ここは違つたようです。次に行きましょう。」

彼女は身体に着いた枯葉を払つて歩き始めた。山の上の方はゴツゴツした岩場だと想像していたのだが、ここは松の葉が散り敷いて少しふかふかになった道が続いている。そういえばこのあたりにも松が多いけれど、夙川公園の松とはずいぶん雰囲気が違ふ。そうだ、幹の色が違ふからだ。

「このあたりの松って、幹が赤茶色ですね。先週、夙川公園に行ったときに見た松の幹

は、もつと黒っぽかったように思います。」

「このあたりに生えているのはアカマツ。山の尾根筋にはアカマツが多いです。夙川公園で見られたのは、海岸に多いクロマツでしょう。」春川さんはちよつとだけ歩みを止めて、息をつきながら答えた。

「それより、夙川公園って、羽衣の桜のことを調べに行ってくださいませんか。」

「実はそうです。結局、お花見をしてきただけでした。」

「本当に申し訳ありませんでした。そういえば、阪急の夙川駅の南側には、羽衣町がありますね。」

「えっ、ご存じだったんですか。僕は駅にあった地図を見て知りました。」

「あの周辺には松が多いので、住宅地として開発が進んだ時に、松の枝に天女の羽衣がかけられているのを想像して、名前が付けられたそうです。」

たしかに松が多いとは思ったが、「羽衣町」の名前もそこから来ていたとは。

「片鉾池にも行きました。水の上に張り出すように公民館が建っている池です。」

「私も行ったことがあります。あの池は1907年に開園した「香櫨園（こうろえん）」という大きな遊園地の一部だった場所で、池に滑り落ちるウォーターシュートがあったらしいです。」

100年以上前の遊園地って、どんなどころだったんだらうか。

しばらく上り坂が続いて、その後、少し下っていったところで、春川さんはタブレットを出して位置を確認した。

「ここが次のスポットです。行ってきます。」

彼女が森に入っていくのを見送って、またあの不安な時間が続くのかと少し憂鬱になった時、遠くから呼ぶ声があった。

「青木さあーん。足元に気を付けて、こちらにいらしてください。ここなら安全に来て

いただけそうです。」

僕は、はやる気持ちを抑えながら、慎重に斜面を降りていった。枯葉や枯枝が積もっていて、足元でざくざくと音を立てた。いくつかの起伏を超えたところで視界が開けて、春川さんの姿が見えた。

そしてその前に、新緑の中で木漏れ日を受けて、白く光る桜の木があった。

「これが、羽衣の桜……。僕は息をのんだ。

樹高は5メートルくらいだろうか。四方八方に広がる大枝から、左右に長く伸びた細枝だけが曲線を描いて垂れ下がり、そこに真っ白な花が幾重にも帯状にならんで、流れるように咲いている。

「見つかったんですね。」

「ええ。あなたのおかげです。」

「僕の方ではありません。でもすばらしい桜です。本当に天女の羽衣が枝にかけられて
いるように見えます。」

「植物ホルモンの変化で、こんな独特の姿になったんだと思います。」

そういえば、桜の花の季節は過ぎたと思っていたのだが。

「街の桜は散ってしまったのに、これはなぜ咲いているんでしょうか。」

「それは、この桜がカスミザクラだからです。」

「カスミザクラ？」

「山の少し深いところに分布している、野生の桜です。よく見られるソメイヨシノやヤマザクラより、2週間ほど遅く咲きます。だから、今が花の盛りです。」

僕は、周囲に花を咲かせたとても小さな桜の木が数本あるのに気がついた。

「これも羽衣の桜ですか。」

「落ちた種から生えた苗木です。桜の中にはこのように小さい苗木のうちから花を咲かせるものがあるのですが、種を集めて上手に育てれば、鉢植えの桜を生産できます。手記に書かれていた『地域の産業に貢献する』というのは、このことだったのでしょう。」

春川さんは嬉しそうに言った。

そのとき、つむじ風が木々を揺らして、山肌を吹き抜けた。そして羽衣の桜の無数の花びらが、天空から蝶のようにひらひらと舞い降りた。

僕はこの日のめぐりあわせを、女神様に感謝したのだった。

(羽衣の桜 了)

IV. まぼろしの電車

(一)

その人がいたのは、鉄道模型売場だった。紺色のスカートとジャケットの大学生ぐらいの女性。ここではあまり見かけない服装で、売場の端から順番に、長い時間をかけて眺めていたので、かなり目立っていた。

「何かお探でしょうか。」僕は声をかけた。

彼女は振り返ると、ほっとしたような表情を見せた。

「すみません。横の壁がなくて向こうが見えている電車って、ないでしょうか。」

僕は困惑した。横の壁がない電車なんて見たことがない。そんな電車があったら、危なくてお客さんが乗れないじゃないか。

「申し訳ありません。そのような電車の模型は置いておりません。」

「そうですか。ありがとうございます。」彼女は残念そうに言って、立ち去ろうとした。

いや待てよ。聞かれたということは、僕が知らないだけで、実際にあるのかもしれない。確かめないわけにはいかない。

「よかったらお調べします。お名前と連絡先をお教えください。」

「本当ですか。助かります。」

彼女はテーブルで名前と電話番号を書いた。

「衣川 藍（きぬがわ あい）」それが彼女の名前だった。

僕はしばらくして帰ってきた鉄道模型担当の先輩に「横の壁がない電車」のことを聞いたのだが、「知らない」と言われてしまった。

三年前のことだ。

高校生の藍は、物差しを借りようと家の二階にある父の書齋で机の引き出しを探していた。見つかった物差しを抜き出したとき、いっしょに出てきた封筒に目が留まった。

「まち子さん」

封筒には、父の字でそう書いてあった。知らない名前だ。勝手に見るのはよくないとは思いながら、藍は衝動に駆られて封筒の中身を取り出した。

それは数通の手紙だった。手書きではなく印刷されたものだったが、郵送されたらしく、三つ折りにした跡があった。日付は両親が結婚する二年前の年だ。少し読んでみたら、デートがとても楽しかった、というような内容が目に入ってきて、思わず読むのをやめた。

一つ上の引き出しには鍵がかかっていた。何が入っているのか知りたくなって鍵を探し

たが見当たらない。彼女の写真でも入っているのかと、余計な想像が膨らんだ。

後ろで物音がしたような気がして、慌てて手紙を封筒に戻し、引き出しを閉じて父の書斎を出た。頭がくらくらして、床につまづきそうになった。

母と結婚する前の話だ。父がどんな女性と交際していたとしても、責めることはできない。それはわかっていたのだが、幼いころからの父との大切な記憶が偽物だったように思えてきて、受け入れることができなかった。

一階のリビングから父と母が談笑する声が聞こえた。藍は急に淋しくなつて、自分の部屋に駆け込むと布団をかぶって耳をふさいだ。

数分経った頃、ノックの音がした。

「藍ちゃん、ちよつといいかな。」父の声だ。だめ。今は聞きたくない。

「なに？」

「急に思い出して気になったことがあって。」

気持ちに反して体が動いてしまい、布団から出て行ってドアを開けた。

父は時折り、現実だったのかどうかよくわからなくなった昔の記憶について、藍に話した。月夜に見た虹とか、森の中で遭遇した何十匹もの大きなテントウムシとか、スキー場のリフトみたいなものに乗っておとぎ話の世界を回る遊園地のアトラクションとか、二階にあるのに、窓の外に庭園が広がっている喫茶店とか。見たことのないものばかりで、何も教えてあげることではできなかったが、藍はそんな話を聞くのが好きだったのだ。

しかし、父と会ってみると嫌悪感のようなものがこみ上げてきた。

「子供のころ、横の壁がなくて向こうが見えている電車が走っているのを見たような気がするんだ。でも、今になってみると、そんな電車が本当にあったとは思えない。あれは、まぼろしだったんだらうか。」

「ごめん。今はちょっと余裕がない。」藍はわざと不機嫌そうに答えて、乱暴にドアを閉

めた。罪悪感と、悲壯感と、そして危なげな快感が入り混じって心を満たした。

「悪かった。忘れてくれ。」父はドアの向こうで言うと、階段を下りて行った。

その日から、藍が父と会話することはほとんどなくなった。一か月ほどして、父は会社で断り続けていた単身赴任を承諾し、東京に旅立った。

(三)

父が体調を崩したという知らせがあったのは、先週のことだ。母は急いで東京に向かい、藍は一人で不安な夜を過ごしていたのだが、やがて母から電話があつて、「過労によるもので静養すれば回復するらしい。あさつてには帰ります。」と言われた。

少し落ち着いてリビングで休んでいると、不意に父の書齋で見た手紙のことを思い出した。これまではその手紙について考えるだけでもつらかったのに、なぜか読みたい気持ちが抑えられなくなった。

藍は父の書齋に入ると、机から手紙を取り出して読み始めた。何年ぶりかで座った父の椅子が、とても心地よかった。

【最初の手紙】

衣川さんへ

お元気ですか。

衣川さんとお知り合いになることができ、とても嬉しく思っています。あの日から見るものすべてが新鮮に感じられ、楽しい毎日を過ごしています。

目を閉じる度に、一緒に歩いた町の風景、心躍るお茶のひととき、聞かせていただいた

織姫たちの伝説など、夢のように思い出されて、幸せな気持ちになります。

できることなら、またあの喫茶店で衣川さんとお話をしたいです。

まち子

最初に読んだときは浮かれた感じばかり伝わってきて良い印象がなかったのだが、今度はなぜか自分も少しだけ幸せな気持ちになれたような気がした。

【二通目の手紙】

衣川さんへ

今日は買い物にお付き合いました。ありがとうございます。以前から商店街で買い物をしてみたいと思っていたのですが、一人でお店に入るのにはなんとなく勇気が必要で、入ったことがありませんでした。今日は衣川さんと一緒だったので、お店の人たちと

も楽しいお話をして、お気に入りの品物をいくつも買えました。あの時、衣川さんに買っていたいただいたハンカチを、何度も取り出して見てしまいます。

まち子

【三通目の手紙】

衣川さんへ

夜の宝塚ファミリーランドに行ったのは初めてです。ジェットコースターが光の海にダイブしているみたいで、幻想的な光景に感動しました。お化け屋敷はちよつと怖かったけれど、いつか好きな人と入ってみたいと思っていたので、夢が叶ってよかったです。今も幸せな余韻にひたっています。

まち子

【四通目の手紙】

衣川さんへ

今日はウォーキングの会に参加していただいて、ありがとうございました。皆さんも衣川さんとの話が盛り上がって、とても楽しかったそうです。何人もの人から「いい人とお付き合っていますね。」と言われたので、気分がよかったです。

まち子

そして最後の手紙には、なぜかこんなことが書いてあった。

衣川さんへ

急に予定が変わって、一週間早く出発しなければならなくなりました。このまま衣川さんとお会いできなくなるのは、とても淋しいです。

これまで、本当にありがとうございました。

先日、背景に星空の描かれた小さな人形を見つけ、衣川さんに話していただいた「星月夜の織姫」とイメージが重なって、思わず買ってしまいました。

喫茶アルペジオのマスターにお願いして、しばらくのあいだ飾ってもらっています。もしこれを見られたときには、私のことを思い出してくれたら嬉しく思います。

お元気で。

まち子

いったいどんな事情で、まち子さんは父と離れ離れになってしまったのだろうか。もし二人が結ばれていたなら、自分が生まれることはなかったのだろう。それなのに、まち子さんの気持ちを思って涙があふれてきた。

藍が一人で夜を明かしたのは初めてだった。雨戸を開けて部屋に朝の光が満ちると、新しい世界が生まれたような感じがした。

その日は休日だったが、母のいない家で一日過ごすのは気が進まなかった。どこかへ出かけようと考えを巡らせていたら、まち子さんのことばかりが頭に浮かんでくるので、父とまち子さんの足跡を辿ってみることにした。

インターネットで検索すると、ここからそれほど遠くないところの「アルペジオ」という名前の喫茶店は一軒だけで、阪急の池田駅のすぐ近くにある。池田には古代に大陸からくればとり・あやはとりの二人の織姫が渡ってきて織物や染色の技術を伝えたという伝説があるそうなので、まち子さんの手紙にあった「織姫たちの伝説」とも一致している。

駅前から北の山手に向かって「サカエマチ商店街」が伸びている。根拠はないが、手紙にあった商店街はここだと思った。

藍はまち子さんの手紙をバッグに入れて家を出た。

阪急の池田駅までは、家の最寄り駅から電車を乗り継いで数十分かかる。幼稚園のころ、遠足で池田市立動物園に行ったが、この駅で降りたのはそのとき以来だ。

改札口の外には広くて長い通路が線路に沿うように左右両方に続き、飲食店や案内所などが並んでいた。通っていくのは家族連れが多い。中にカップヌードルを入れて風船のように膨らませた透明なバッグを、赤いひもで首から提げている子供を見かけるのは、「カップヌードルミュージアム」からの帰りなのだろう。

サカエマチ商店街は、駅のすぐ横の大きな通りの向こう側にあった。横断歩道を渡ってアーケードに入ると、左右の柱から斜めに立てられた「落語みゅうじあむ」の幟（のぼり）

や、店名を表示した吊り看板から下げられた、古風でおしゃれなフラッグがたくさん並んでいた。

食事、喫茶、パン、果物、衣服、靴、雑貨、家電……。店の前に並べられた様々な商品と手書きのポップ。気品のあるショーウィンドウから覗く町屋風の店内。普段の買い物とは少し違う風景に包まれていく。人通りはあまり多くないが、親しげに話しながら歩いていく人たちは、とても楽しそうに見える。

その時、少し前を歩く若い男女の話し声が聞こえてきた。

「…満天の星の明かりに照らされて、織姫たちは天皇に献上する布を朝までに織りあげることができたそうです。」男が言った。

「素敵なお話ですね。」女が答えた。

この人たち、織姫伝説の話をしているの？

藍は、時間を超えて父とまち子さんの会話を聞いているような感覚におそわれた。そう

いえば、男の後ろ姿はなんとなく父に似ている。

まち子さんの手紙には2回、織姫伝説のことが書いてあったはず……。バッグの中の手紙の内容を確かめようと探したわずかな時間に、商店街の北の端のところまで二人の姿は視界から消えていた。

急いでその場所に行ってみたが、どこにも二人の姿は見当たらなかった。そこからは東西に少し広い通りが続いている。スマートフォンで調べると、通りを西に進めば大衆演劇場の「池田呉服座（いけだごふくざ）」や商店街に幟が並んでいた「落語みゆうじあむ」、通りを渡って北に行けば江戸時代から続く銘酒「呉春」の酒蔵、そして東に進めば「星月夜の織姫」伝説の場所だという「星の宮」があることがわかった。もしかしたらさっきの二人が星の宮に行ったのかもしれない、と思った藍は、東に向かった。

通りが少し細くなって、住宅地に入っていくところに「星の宮」があった。二人の姿を探したが誰もいない。「明星大神宮」と書かれた石造りの鳥居の向こうに低い白壁で囲わ

れた敷地があり、神社よりは小ぶりなお社（やしろ）が建っていた。由来板には、確かに織姫伝説のことが書かれている。現存のお社は明治初期頃のものらしく、町内会が守りしているようで、すぐ横に古風な町内会の会館があった。

藍はお社の前で手を合わせ、織姫たちのいる古代の光景を思い浮かべた。心の中のもやもやが晴れていくような気がした。

それからどこを通ったのかよくわからない。少し懐かしい感じがする街を、しばらくの間あてもなく歩いた。喫茶アルペジオには必ず行こうと決めていたが、なかなか足が向かなかった。

池田駅の近くで食事をして喫茶アルペジオの前に立ったのは、昼をかなりすぎたころだ。レンガ積みのレストランな外観の店で、ショーウィンドウにはコーヒー、紅茶、ココア、ジュース、ケーキ、プリン、パフェなどの喫茶メニュー、そしてサンドイッチ、スパゲッティ、

ピラフ、オムライス、カレーライスなどの軽食メニューのサンプルが、にぎやかなコレクションのように並べられていた。ソーサーの上に倒してあるカップからローストされたコーヒー豆が流れ出していて、芳醇な香りが伝わってくるようだ。

ドアを開けるとチリンチリンとチャイムの音がして、「いらっしやいませ。」と女性の声が響いた。そちらを見た藍は目を疑った。

そこには、二人の少女の人形が星空を背景にして立っていた。

「お好きな席にどうぞ。」もう一度店員の声がして、藍は我に返った。一瞬、人形に声をかけられたように錯覚してしまった。いや、本当に人形があいさつをしてくれたような感覚が続いている。

店内が見渡せる席に座った。緑色のビロードが貼られた木製の椅子で、落ち着いた雰囲気だ。カウンターの中では、マスターらしい中年の男性がコーヒーを淹れていた。

「ご注文はお決まりですか。」

店員から聞かれたが、人形のことと頭がいっぱいで思いつかなかったので、少し考えさせてもらった。

メニューを眺めていても、人形について知りたいという気持ちがあんまり大きくなってくる。店員が詳しく知っているとは思えないので、カウンターの男性に直接聞こうかとも思ったが、クレームをつけているような素振りに見えて、店員に不安を与えてしまうのではないかと、おかしなことが気になった。

「すみません。」藍は小さく手を挙げて店員を呼んだ。

「柑橘のチーズケーキと、ホットコーヒーのセットをください。それと…あの人形について教えていただきたいのですが。」

「は…はい。」店員は少し戸惑った様子で奥に戻り、カウンターの男性に報告に行った。彼はやはりマスターと呼ばれている。

「いらつしやいませ。」マスターはカウンターから出てくると、深々とお辞儀をしながらあいさつした。

「あちらの人形のことですか。」

「はい。すみません。ちよつと気になったものですから。」

彼は少し考えてから答えた。

「もう二十年以上前になりますが、若い女性のお客様が、自分は遠くに引越すので一か月ほど飾ってほしい、後は自由にしていただいてかまいません、と言って置いて行かれたものです。素敵な人形だと思ったので、そのまま飾ってあります。」

「そうですか。ありがとうございます。」本当は人形に会えたことの驚きと感謝の気持ちを伝えようとしたのだが、いい言葉が浮かばなかった。

「ごゆっくりどうぞ」マスターはそう言って、カウンターの中に戻っていった。

爽やかな彩りのケーキは、甘酸っぱくて幸せな味がした。心地よい音楽が流れる中で、

藍は目を閉じてケーキの味とコーヒーの香りが身体に吸収されていくのを感じた。そして、今日は来てよかった、と思った。

その夜、藍は父の本棚で見慣れない鍵を見つけた。あまり期待することもなく父の机の鍵のかかった引き出しの鍵穴に差し込んで回してみたら、簡単に開いてしまった。

少しずつ引き出しを開けていくと、写真の端が見えた。

まち子さんの写真？ 緊張に震える手で引き出しを最後まで開けた彼女は、少しがっかりした後で、安堵のため息をついた。

それは、若き日の母の胸に抱かれた、赤ん坊の藍の写真だった。

住宅地に囲まれた緑の小山の脇を抜けて、まっすぐに線路が伸びていた。霧がかかっていて遠くの方は見えないが、やさしい光が周囲を包んでいる。

シャーッという音が、線路を伝わってきた。どこかでカン、カン、カン、と踏切が鳴り始め、霧の中から電車が姿を現した。

あれは阪急電車？ でも、いつも見ている阪急電車とはちよつと違う。なんだか古めかしい感じがする。もしかしたら、横の壁がない電車じゃないだろうか。

「写真を撮っておかなきゃ。」藍はバッグの中のスマートフォンを探したが、なかなか見つからなかった。

タタン、トトン、トトン。タタン、トトン、トトン。トトン。電車が通り過ぎていく。でも、いくらそちらを見ようとしても、なぜか見る事ができない。

「待って！」

藍は自分の叫び声で目を覚ました。そしてその時から、横の壁がない電車のご頭から離れなくなった。

大学に行っても、横の壁がない電車のご頭が気になって何も手につかなかった。その正体を少しでも早く確かめたいと思って、講義が終わると早めに帰宅した。

最初に調べたのはインターネットだ。「横の壁がない電車」で検索すると、ヒットするのはほとんどが「座席の横に壁がなくて、手すりになっている電車」の話題ばかり。それでもどこかに有力な情報があるだろうと期待して、いくつかの検索サイトを使って何百ものページを閲覧したが、手がかりになりそうな情報はなかった。

画像検索では様々な電車の車内や外観の画像が次から次へと出てくるが、それらしい電車は見当たらない。

AIチャットボットが「何でも聞いてください」と言っている検索サイトがあったので試してみた。

「横の壁がない電車はありますか。」

『『ロングシート』』と言って、仕切り壁のない座席の電車があります。」

「座席ではなく、車両そのものに横の壁がない電車はありますか。」

「車両そのものに横の壁がない電車は見つかりませんでした。」

やはり情報がない。

他の検索サイトのAIチャットボットでは

「はい、横の壁がない電車はあります。オープンエア電車、オープンエンド電車、オープントップ電車などです。」という答えもあった。しかし画像を見ると、どれも眺望や外気などを楽しむために開口部を大きくしたり、窓ガラスを無くしたりしている観光列車で、「横の壁がない電車」ではなかった。

それからも有力な情報が得られないまままで時間が過ぎて行った。冷静に考えることができれば、もっといい検索方法を思いつけるような気もしたが、必死になっている状態が続いたせいか、思考のスイッチを切り替えられなくなってしまっていた。ひどく疲れたので終わりにした。

次の日の帰りは、西宮の大きな書店に行った。ホビーのコーナーには数十冊の鉄道関係の本が並んでいて、縦が30センチくらいありそうな大型本が多い。この分野を中心にしている出版社が数社あるようで、棚の大半はこの数社の本だ。著者の方も、書いている人が限られているのか、一人でいくつもの出版社からよく似た表題の本を出していて、どれから見たらいいのか迷ってしまう。

一冊を手にとってページを開いてみた。大型本といっても薄いので、それほど重たくはない。内容は、ちょっと昔の風景の中を走る電車の写真集、といったものだ。自分が生ま

れる前の写真が多いが、見覚えのある場所もいくつかある。最後まで目を通したらかなりの数の電車の写真があったが、似たようなものばかりで、いろいろな形の電車を紹介しているわけではなかった。

棚にある本を順番に確認していく。さつきと同じような電車の写真集的なものを中心に、それぞれの電鉄会社別で型番の変遷を紹介しているもの、一種類の車両を詳しく解説しているもの、駅や周辺の昔と今の写真を対比して見られるようになっていたものなど、様々な本があった。端から端までひと通り見たが、参考になるような本は見当たらなかった。

自分はどんな本に期待してここに来たんだっただろうか、と考えた。いろいろな電車の絵や写真が載っている本？ だったら鉄道図鑑を見たらいいのではないだろうか、と思い直して児童書のコーナーに行った。鉄道図鑑には確かにいろいろな電車が載っていたが、最後まで見ても「横の壁がない電車」らしいものはなかった。

次の日の大学は一限目から講義があった。前の晩は早めに寝たのだが、夢の中でも鉄道の本を見続けていたせいか、まだ頭がぼーっとしていた。

その日の講義が終わってクラブハウスの横を通った時、階段の登り口に「鉄道研究会」の看板があるのを見つけた。ここなら「横の壁がない電車」のことを知っている人がいるかもしれないと思い、屋外に面した鉄の階段を恐る恐る登った。

鉄道研究会の部室は、二階の一番奥にあった。「ごめんください。」鉄道のパネルが取り付けられたドアをノックして何度か呼びかけてみたが、返事がなかった。ポストには、数日前に配布されたらしいお知らせが差し込んであった。どういう事情なのかわからないが、しばらく人が来ていないようなので、いったんあきらめるしかなかった。

その日の帰り、母から懐中電灯を買ってくるように頼まれていた藍は、駅前の電器店に立ち寄った。そして、その店に鉄道模型の売り場があることを思い出した。

僕は初めて交通館の前に立っていた。

先週のことだ。春川さんは、もう半年たっていたのだが、いつしよに稲倉山に登ってもらったお礼だと言って、ホテルで夕食をごちそうしてくれた。母親以外の女性と二人で食事するのは初めてだったこともあって、武庫川の夜景を見ながらの夕食はとてもすばらしいものだったのだけれど、これでまたすぐに会いに行ったら、調子に乗って恋人気取りで付きまってくる危ない人間だ、と思われてしまいそうな気がした。というより、僕は実際にそんな気持ちを起こしかけていた。しばらく彼女には近づかない方がいいかも知れない、と思ったので、博物館の総合窓口のある企画館は通らずにここまで来たのだった。

白と黒と灰色、シルバー、そして透明なガラスの壁で構成された交通館は、他の建物とは全く違う、無機質な美しさを放っていた。たしか交通館は資料の整備に時間がかかって、近年までオープンしていなかったはずだ。

鉄道関係の展示は一階にある。案内映像の流れる前室を抜けてメインフロアに入ると、様々な音が一気に押し寄せた。モーターの作動音、エアアの抜ける音、機械の動きを知らせる電子音、案内の音声、そして子供たちの歓声。それらは一体となって巨大な工場のよな館内に反響し、僕の身体を包み、外部とは異なる空間を生じさせていた。

正面には4両の電車が、この館の巨大な主（ぬし）のように鎮座していた。向かって左側の2両は全体があずき色。右側の2両は上の部分がクリーム色で、下の部分は1両が朱色、もう1両は濃い青色をしている。

左側の2両が阪急電車、右側の2両が阪神電車だということは一目でわかった。車両番号は左から820、3021、3519、5218。2両の阪急電車は同じような色だが、

820は屋根と前面や側面の間が帯状の低い突起で区切られており、窓の上と下にも車体を囲むように同様な突起が付いているので、少しいかつい感じに見える。また乗降口は今と違って片開きの一枚扉になっている。3021の方は一般的な外観の阪急電車だ。

それぞれの車両の説明板を読んでみる。

○阪急810系電車（1950年・1985年）..長さを京都線の100形、幅を神戸線の920形に合わせて制定した「阪急標準車体規格」で製造された最初の車両。

○阪急3000系電車（1964年・2020年）..阪急電車のデザインの標準となった2000系（1960年）のスタイルを引き継ぎ、架線電圧の600Vから1500Vへの変更に対応した車両。2000系と同様に発電ブレーキを採用している。1969年に製造を終了したが、2020年まで運行された。

○阪神3301形・3501形電車（1958年・1989年）..特急・急行用の車両。車体下部の色を当時の人気ドラマ「赤胴鈴之助」に例えて、「赤胴車（あかどうしや）」と

呼ばれた。3301形は車両の前後に運転台があり単独運用が可能な両運転台、3501形は2両以上を連結して運用する片運転台である。

○阪神5101形・5201形電車（1959年・1981年）…試作車の5001形（1958年）に続いて量産された各駅停車用の車両。「赤胴車」に対して「青胴車（あおどしや）」、また停車駅の多さに対応するため、加速性能を高くしたことから、「ジェットカー」と呼ばれた。5101形は両運転台、5201形は片運転台である。車体は基本的に鋼鉄製だが、5201と5202の2両はステンレス製で無塗装だったため銀色をしていたので、「ジェットシルバー」と呼ばれた。

阪急電車は「○○系（けい）」、阪神電車は「○○形（がた）」になっている。これについても解説が書かれていた。

※系（けい）と形（がた）…電車には、モーターのついているものついでないものなど、いくつかの「形式」をまとめた「系列」という分類があつて、一般的には同じ系列の車

両を連結して編成することになっているので、車両の種類を示すときには、その車両の系列を指して「○○系」と呼んでいます。しかし、1980年代ごろまでの阪神電車では、異なる系列の車両の混成があることを想定していたため「○○系」という呼び方をせず、個別の形式ごとに「○○形」と呼んでいました。

つまり、阪神電車では一本の電車を指して「あれは○○系」と呼ぶことができない場合があり、「○○系」という呼び方にメリットが少ないから、より正確に車両の形式を表現できる「○○形」という呼び方をしていた、ということのようだ。

阪急の3000系は、子供のころからよく乗っていた電車だった。なんだか知らない場所知り合いにあったような気持ちになって、僕は思わず3021に乗り込むと、緑色のシートに座った。今でもほぼ同じ内装の車両が走ってはいるが、少しだけ薄い色の壁や、窓についているアルミ製の錠戸（よろいど）の日よけがとても懐かしい。

まだ宝塚ファミリーランドがあつたとき、この電車は宝塚駅に着く寸前にその中を通つた。僕は必死に窓にとりついて、一瞬だけ見える動物たちの姿を追つたものだ。

しばらく空想の時間旅行を満喫した後で、僕は「横の壁がない電車」を探しに来たことを思い出し、慌てて3021を降りた。

周りにはモーターやブレーキ、自動ドアなどの動作展示、運転シミュレーター、各種の機器の原理を学べる模型、保存されている部品や看板などがあつたが、手がかりにはなりそうにない。

少し奥へ進むと、20分の1の縮尺で精巧に再現された、1両の長さが1メートルほどもある列車の模型が並んでいた。全部で100両以上はあるだろう。見渡す限りの車両の隊列は壯観だ。

JRと、その前身の国鉄の車両が手前に並んでいる。最初は、1960年代までこのあたりを走っていたという蒸気機関車のD51とC57。D形は動輪が4対で引く力が強く、

C形は動輪が3対でスピードが速かったらしい。D51は主に貨物用、C57は主に旅客用に使われていたようだ。宝塚駅の近くを走るD51の写真パネルが掲示されていて、すごい迫力がある。走っている蒸気機関車を見たことはないが、神戸の街なかで保存されているD51は何度も見に行った。

次に目を引いたのはディーゼル機関車のDD51。赤い角材のような車体の中央部に司令塔のような運転室が付いた、特徴のある姿をしている。子供のころに一度だけ、記念列車をけん引して宝塚駅に来たDD51を見たことがあって、ディーゼルエンジンの唸り声に圧倒された。僕が電気以外の動力で動く列車を見たのは、この時だけだ。

103系電車。この電車は、その車両が主に走っている路線によって色分けされていた。前面と側面は単色の塗装で、朱色、青色、黄緑色、黄色と色違いのものが並んでいると、カラフルでとても美しい。宝塚駅をよく通っていたのは黄色のもので、イエローライナーと呼ばれていた。

113系電車。これも何種類かの塗装があるが、窓まわりが濃いオレンジ色、その他の部分が濃い緑色の「かぼちや電車」と呼ばれていたものが印象的だ。宝塚駅の付近でも、かぼちや電車が他の色の113系と連結されて走っているのを見たことがある。

0系新幹線。0系は1969年、最初に登場した新幹線だ。シンプルなフォルムをしていて、現在の新幹線とはかなり顔つきが違う。当時は「のぞみ」がなくて、「ひかり」と「こだま」だけだったらしい。国鉄・JRの在来線の線路幅は1.067メートルなのに対して、新幹線では私鉄と同じ1.435メートルになっているが、ここに展示されている大型模型なら線路の幅の違いがよくわかる。

国鉄・JRの車両の模型のとなりには、阪急電車の車両の模型が展示されていた。1910年、箕面有馬電気軌道として開業した際の路面電車のような外観の1型から、現在も運行されているものまで、歴代の車両が並んでいる。

次に阪急の貨車。旅客車のようなあずき色ではなく、黒い車体をしている。阪急でも1

954年まで貨物営業をしていたそう。その後は作業用として使われている。

そしてその中で、僕は探している相手と遭遇した。

車体の前後に乗務員室があつて、前や後ろから見ると普通の電車のようにだが、乗務員室以外の側面にはダンプカーの荷台のような開閉式のアオリがあるだけで、側壁はない。屋根は鉄骨のはしごのようになっていて屋根板はない。正面の窓の下には「4210」の文字。その下には黄色と黒の縞模様。説明板には「阪急貨車4207、4209、4210（1949年・1980年）」とあつた。

展示台には、1964年に阪急の池田車庫で撮影されたという、4210の写真が掲示されていた。「池田車庫は池田市の槻木町（つきのきちょう）にあり、1910年、箕面有馬電気軌道（現在の阪急電車）の開業式典にも使用されたが、1971年の平井車庫竣工に伴い、翌年撤去された。」のだそう。

模型を横から見ると、確かに向こうが見えていた。僕はいろいろな角度からその空洞を眺めて、車体の向こうの景色を確認したのだった。

翌日、僕は出勤するとすぐに衣川さんの携帯に電話して、彼女が探している電車らしいものがあつたことを知らせた。彼女はその日の夕方に来店した。

僕は博物館で撮ってきた「横の壁がない電車」のパネルの写真を渡して言った。

「これがその電車です。いかがでしょうか？」

「すごい。本当にあつたんだ。」彼女はとても驚いていた。

「すみません。実は、父が『昔見たような気がする』と言っていただけで、私もどんな電車なのかよく知らないんです。でも、きっとこれだと思います。この電車の模型って、買えるものはあるんでしょうか。」

「申し訳ありません。この電車の模型で市販されているものはないようです。模型は阪

神間総合博物館の交通館で展示されていますので、よかつたらお訪ねください。」

僕は電車の写真と一緒に、博物館のパンフレットを渡した。

「ありがとうございます。模型が買えなくてごめんなさい。また買い物に來ます。」

「ありがとうございます。お役に立ててよかったです。」

彼女は何度も頭を下げてから出て行った。

(七)

藍は阪神間総合博物館を訪ねた。

電器店でもらったパンフレットに場所が示してあったので、模型が展示してあるエリアには迷わずに行けた。模型は想像していたものよりもずっと大きくて、その質感に圧倒さ

れた。ほとんどは見たことのない車両ばかりだったが、一つ一つ見ていくうちに、自分が昔、こんなコレクションに夢中になっていたような既視感におそわれた。

何十両かの模型を見たところで、ようやく「横の壁がない電車」の展示台に行きついた。しかし、そこに模型はなく、代わりに「この模型は、レイアウトで走行しています」と書かれたパネルが立てられていた。「レイアウト」って、いったい何だろう？

建物のいちばん奥のところに、その「レイアウト」があった。幅が30メートルはありそうな巨大なジオラマに街が再現され、張り巡らされたレールの上を大きな模型の列車が走っていた。模型でもかなり迫力のある写真が撮れるらしく、何人もの人が大きなカメラを構えて必死にベストショットを狙っている。

しばらく眺めていると、トンネルを抜けて黒い電車の模型が姿を現した。まちがない。電器店で写真をもらった「横の壁がない電車」だった。それは走行音を響かせながら接近し、幅の広い窓枠のような車体が目の前を駆け抜けた。

博物館を出ると、雨が降りだした。持っていた折り畳み傘を広げて「花のみち」を歩いていたとき、少し前の桜の木の横に、女の人が傘もささずに立っているのを見つけた。

「お入りください。濡れてしまいますよ。」藍は傘を差しかけて言った。

「すみません。」彼女は消え入りそうな声で答えた後で、少しふらついた。

「あの建物にベンチがあります。あそこへ行きましょう。」

藍は肩を貸して、ベンチまで歩いた。彼女は泣いているように見えた。

「大丈夫ですか。お身体の具合が悪いですでしょうか。」

「いいえ。」女の人はまた小さな声で答え、しばらく沈黙してから話し始めた。

「私、武庫川の堰堤（えんてい）でせき止めた水を引き込んで、水流で発電をする研究をしているんです。でも、このあいだの大雨で増水した時に、発電機が水に浸かって壊れてしまっ、研究室の人たちには『お前のやっていることはお遊びの無駄遣いだ』って言

われるし、どうせなら、私も雨に濡れて壊れてしまった方がいいのかな、とか思つて……。
ああ、関係ない人に何言つてるんだらう。」

「関係ないことなんてありません。」突然、言葉が流れ出した。

「私は、お姉さんのことを大切に思っています。だから、お身体をだいじにしてください。…… おかしなこと言つてごめんなさい。」

「ううん。」女の人は首を振つた。そして、藍の方を見て大きく息をすると、少しだけ笑顔になつて言つた。

「おかげで何だか元気が出ました。ありがとうね。どうか、あなたにいいことがありますように。」

「ありがとう。お姉さんにも、いいことがありますように。」二人は手を振つて別れた。
いつの間にか雨が上がつて、おだやかな日差しが街を照らしていた。

次の日、藍は母に言った。

「お母さん、私もお父さんに会いに行こうと思うんだけど、いい？」

母は少し驚いた様子だったが、嬉しそうに答えた。

「いってらっしゃい。お父さん、きっと喜ぶわ。」

藍は急いで新幹線の予約と身支度をすると、横の壁がない電車の写真をバッグに入れて家を出た。

街路樹の木漏れ日が、地面に動く模様を作っていた。長い坂を下り、川のほとりで何十羽もの鳥たちが一斉に飛び立つのを見たとき、彼女は確信した。

私はみんなの幸せを願っている。花のみちで会ったお姉さんも、電車のことを調べてくれた店員さんも、大好きな両親も、そして父が愛したまち子さんも。

染殿井の碑（そめどのいのひ）は、住宅地の中の空地のような場所に立っていた。自然石に名前が彫ってあるだけの質素な碑だ。昔、大陸から渡ってきた織姫のくれはとり、あやはとりが糸を染めるのに使った井戸のあった所だと言われているが、今では井戸の痕跡は残っていない。

行夫は首から一眼レフカメラを提げたまま、その前でしばらくの間、染織の技術を伝えてきた人々のことを想像しながら感慨に浸っていた。ここはずっと来たいと思っていた場所なので、あえてガイドマップに載っている史跡の最後に訪れたのだった。この碑自体も二百年以上前に地元の俳人が建立したものだそうで、とても風情がある。

これで池田に来た目的は達成した、と思って北の方角にある駅に戻ろうとしたのだが、歩き始めた途端に雑念が湧いてきた。この場所は見つけにくくて、来るのにかなり手間取

ってしまった。せつかくここまで来たのだから、できれば他にも何か見てから戻りたい。彼は少し雲行きが怪しくなってきたのを気にしながら、あてもなく西に向かつて進んだ。突き当りのところで北に曲がる。右には織姫の名を付けた呉服（くれは）小学校、左にはのこぎり屋根のダイハツの工場を見ながら進んでいくと、やがて落ち着いた佇まいの住宅地に入った。生垣に竹垣、板塀に蔵、和風住宅に増設された洋館。どれもが景色に調和して、街の風格を形成している。

しばらく家並みを見ながら散策し、そろそろ駅に帰ろうとしたとき、急に雨が降り出した。今日は雨は降らないと思っていたので、傘はもちろん、カメラバッグも持ってきていない。何かカメラを入れるものはないかと焦って鞆の中を探してみたが、見当たらない。

「いけない。カメラが濡れてしまいます。」横から声がした。

振り向くと、同じようなカメラを掲げた大学生くらいの女性が傘を差しかけていた。

「それでは、あなたが濡れてしまいます。」

「大丈夫。もう少し中に寄ってください。」

彼女が急に彼の胸に顔を近づけたので、吐息で一瞬だけ彼のカメラのレンズが曇った。

「どちらへ行かれるんですか。」彼女が聞いた。

「駅の方に行こうと思うんですが。」

「私も駅に行きます。このまま行きましょう。」

彼女は早足で歩き始めた。行夫も歩調を合せて移動しようとしたが、どうしても歩く速さが一致しないので、何度も身体がぶつかってしまう。

「申し訳ありません。僕がうっかり傘を持ってこなかったせいでご迷惑を……。 」

「こんな時はお互い様です。」

しばらく歩いて、二人は駅前の建物に入ることができた。

「ありがとうございます。おかげで濡れずにすみました。」

「よかったですね。」彼女は少し息をはずませながら笑顔を見せた。

駅に行く途中で、行夫は感じのいい喫茶店を見つけた。

「あそこで一休みして帰りませんか。お礼におごらせてください。」

「そんなこと、気にしないでください。」と彼女は言ったが、行夫は「それでは僕の気が済みませんから」と、一緒に店に入った。

「ケーキセットでいいですか。」と彼女に聞いてから、行夫は二つ注文した。彼はチーズケーキとコーヒー、彼女はチョコレートケーキとコーヒーを選んだ。

「いいカメラをお持ちですね。」と彼女が言った。

「一年ほど前から、染め物に興味があつて調べているんです。染め物の色合いがよく再現できるように、と思つて、少し高いカメラを買いました。」

そこまで言って、行夫は彼女を喫茶店に誘っておきながら、何を話したらいいのか、全く考えていなかったことに気がついた。もしかしたら、彼女の方から沈黙が続かないように気を使って、話を振ってくれたのかもしれない。

「さつきは染殿井の碑に行っていました。昔、織姫のくれはとり、あやはとりが糸を染めるのに使った井戸のあった場所だと言われています。この池田には、他にも織姫伝説にまつわる史跡が多くあります。」

「池田にはよく来られるのですか？」

「いいえ。親の知り合いがいて、小さい時に何度か連れてこられたらしいのですが、物心ついてからは初めて来ました。あなたもいいカメラをお持ちですが……。」

「大学で都市計画の勉強をしているので、街の風景を撮るのに使っています。あなたとお会いした室町（むろまち）は、1910年に箕面有馬電気軌道、今の阪急電鉄によって開かれた住宅地で、『日本で初めての郊外住宅地』と言われているところです。」

「とても風格のある街だと思いましたが、そんな特別なところだったとは知りませんでした。」

「そういえば、『室町』という名前は、北隣の槻木町に『梅室』『姫室』という二つの塚があったことからつけられたそうです。織姫伝説と関係があるのででしょうか。」

「それは、織姫たちのお墓だと言われていたところです。実際にはお経をお祀りした『経塚（きょうづか）』だったようですが。」

彼女と話題がつながったのが嬉しかったので、行夫は織姫の話の続けようと思った。

『星月夜の織姫』のお話はご存知ですか。」

「どんなお話なんですか？」

「それはこんなお話です。千五百年以上前のこと、大陸から日本に渡ってきた織姫の『くれはとり』と『あやはとり』は、糸を染め、機を織って、人々に技術を伝えていました。」

ある時、天皇に献上するため、どうしても翌朝までに織り上げなければならぬ布があ

りました。二人は必死で機織りを続けましたが、布が出来上がらないうちに日が暮れて、機織りを続けることができなくなってしまいました。

困った彼女たちが『どうか布を織り上げさせてください』と祈りをささげると、天空に無数の星が満ちてあたりを真昼のように照らしたので、二人は翌朝までに布を織り上げることができたそうです。

ここから歩いて15分ほどのところにある『星の宮』が二人が機織りをしていた場所だと言われている、星の神様をお祀りしています。」

「素敵ですね。そんなお話が伝わってきたことを聞いたら、この街がもっと魅力的に思えてきます。」彼女が瞳を輝かせて言った。

それからしばらくの間、二人は運ばれてきたケーキとコーヒーを味わいながら、染め物や郊外住宅地の話に夢中になった。

別れ際に、行夫は作ったばかりの名刺を彼女に差し出した。

「今日はありがとうございます。僕、衣川行夫と言います。」

彼女は少し困ったような顔で名刺を見つめてから答えた。

「私は…まち子と呼んでください。」

彼女には連絡先も聞かなかったから、たとえそのままになってしまったとしても、ひとときの夢を見させてもらってよかった、と思っていたのだが、数日後に彼女から「また会いたい」という手紙が来て、交際が始まった。

まち子さんは勉強熱心で、いつも「都市の発達過程」や「街の景観形成」などといった本を読んでいたのも、行夫はお祭りとか、遊園地とか、紅葉狩りとかに誘ったら不満に思われるのではないかと心配したが、そのようなことが逆に新鮮だったらしく、すごく喜んでくれた。彼女は出会った日に行った喫茶「アルペジオ」がお気に入り、大学の帰りに待ち合わせては、お茶を楽しんだ。

二人の交際は、次の年の春に突然終わった。まち子さんが泣きながら電話をしてきて、「父がお世話になっていている人が東京で会社を立ち上げるので、大学を卒業したらすぐに行かなければならなくなりました。」と言ったのだ。どうやら彼女にとって、断るといふ選択肢はなさそうだった。最後にもう一度デートをする約束をしたが、出発が早くなつたとかで、それもかなわなかつた。

一年がたつた。

まち子さんのことをまだ忘れられていなかった行夫のもとに、思いがけず彼女から「出張で関西に行くから会えませんか。」と電話があつた。翌日、二人は大阪の喫茶店で待ち合わせた。

紺のスーツを着たまち子さんは、すごく仕事ができる人に見えて、遠い存在になつてしまつたように感じた。

「ご無沙汰しています。」行夫は思わず他人行儀にあいさつした。

「お久しぶりです。」まち子さんは席から立ちあがって頭を下げた。

二人は向かい合って座り、どちらもコーヒーを注文した。

「呼び出してしまつて申し訳ありません。あの時、衣川さんに直接お礼を言っていなかったものだから、どうしてもお会いしたくて。本当にありがとうございます。」

「僕の方こそ、とてもよくしてもらつて感謝しています。」

それから沈黙が続いた。あんなに会いたいと思つていたのに、言葉が出てこない。

先に口を開いたのはまち子さんだった。

「アルペジオに置いてもらった人形は、見られましたか？」

「見ました。とてもかわいかった。」

その人形を見て泣いてしまったことは言えなかった。

「ありがとうございます。マスターにお願いしてよかったです。」

「スーツがよく似合っています。お仕事、頑張っておられるようですね。」

「ええ、おかげさまで順調です。」

まち子さんはスーツの前のボタンを外して息をついた。

「実は、向こうでお見合いの話をいただいているんです。」

行夫は「それはおめでとうございます。」と言おうとしてやめた。自分にとっては全然おめでたくない。

彼は、彼女がスーツの下に着ている青いシャツに気がついた。

「あの、そのシャツは？」

「これは藍染（あいぞめ）です。衣川さんに藍染の体験会に連れて行ってもらってから、すっかり藍染が気に入ってしまっただ。私、いつか自分に娘が生まれたら、『藍』っていう名前にした、とか思ってるんですよ。……おかしなこと言っでごめんなさい。」

その時、彼の胸に、あることを伝えたいという気持ちが湧き上がってきた。

こんなことを言ったら、変に思われるかもしれない。やめておいた方がいいだろうか。でも言いたい。言うなら今しかない。ええい、言ってしまうえ。

「まち子さん、もしよかったら…。」

「もしよかったら？」

「藍ちゃんの父親にならせてください。」

それが、彼のプロポーズの言葉だった。

(まぼろしの電車 了)

(一)

莊嚴な調べが全身に響き渡ると、心を縛り付けていた何かが消えていった。茜（あかね）は中世の建築物のような姿のパイプオルガンを見上げながら、これまでにない解放感を味わった。

「行つてきなよ。リフレッシュできるから。」

このところ元気がなかった茜に職場の先輩がベガ・ホールのチケットをくれたのは、先週のことだ。断るわけにもいかないので半信半疑で来てみたのだが、その言葉に嘘はなかったと思う。

人波に流されるように入口を出ると、カンカンと踏切が鳴って、清荒神駅から宝塚行き

の列車が出発したところで、すぐ横に立派な図書館があつたので入ってみた。

建物に入ったとたん、子供たちの声が聞こえてきた。右側が透明な壁で仕切られた児童書のコーナーになっていて、入口のところでは3歳くらいの女の子が手の届かない高さにある本を、兄弟らしい少年に取ってもらっていた。その奥では、二人の女の子が1冊の本を一緒に読んでいた。陽光に包まれた壁際では、何人かの小さな子供たちが座って絵本に見入っていた。初めて来た場所なのに、なんだか懐かしいような感じがして見ていたら、次の電車もやり過ぎしてしまった。

一駅だけ乗った終点の宝塚駅で、同じホームの反対側に停車している西宮北口行きに乗り換える。やがて車窓から遠くに宝塚大劇場の複雑に構成された赤い屋根が見え、あつという間に近づいて、クリーム色の壁が目の前を通り過ぎ、また赤い屋根を見せて遠ざかっていった。

そのとき、頭の中に何かのイメージが浮かんだ。夢から覚めたら、大きく心を動かされ

る夢だったような感覚だけが残っていて、何の夢だったのか思い出せない、そんな感じだった。茜は流れていく風景を眺めながら、それが何だったのか懸命に考えていたが、数分後にお寺の黒い屋根が見えた瞬間、霧が晴れたように答えは示された。

茜はそれを「お守り」と呼んでいた。

「天野さん……。」思わず口をついて出た言葉が、十年前の記憶を呼び覚ました。

(二)

中学2年生の時、茜と天野さんは同じクラスになった。

昼休み、給食を食べ終わったクラスの女子たちが教室のあちこちにかたまりを作っておしゃべりを楽しんでいるなかで、茜はいつも一人で過ごしていた。一度だけ、近くにいる

子たちが茜の好きなテレビ番組の話題で盛り上がっていたので、「私も見てる。あれ面白いね。」と話しかけてみたのだが、「あつそう。日向（ひなた）さんもあんなの見るのね。」と返されただけで、それ以上、何も話すことができなかった。自分も彼女たちも気まずくなくなってしまって、その時からクラスメイトたちの話の輪に入ることはあきらめたのだった。

その教室で、茜と同じように一人で座っていたのが天野さんだった。「あの子なら話し相手になってくれるかもしれない」と思ったが、天野さんはいつも冷たい表情で黙っていたので、なんとなく声をかけることが怖かった。

昼休みの天野さんはノートを開いて、そこに何かの絵を描いていた。横を通るときに見たら、どこかの風景や実在しないような生き物、不思議な服装の人物、なにかの紋章のようなものなどが描かれていて、どれも驚くほど上手だった。その絵のことについて彼女と話してみたとも思ったが、それは踏み越えてはいけない領域のような気がした。

しばらくして、天野さんが時々、何かを両方の手で握りしめたまま、お祈りでもするよ

うに真剣な顔つきでじっとしていることがあるのに気がついた。天野さんは手の中のもの
を人に見られないようにしている様子だったが、ある時、彼女が机の引き出しに、黒いか
けらのようなものをしまうのが見えた。

茜は、それとよく似たものを知っていた。

茜の家のたんすには木の小箱があつて、古いお金とか、きれいに磨かれた石やサンゴな
どが入られていた。それらは昔から大切にされていたものだとは聞いていたが、いつ誰
がどうやって手に入れたものなのか、全くわからなくなってしまうていた。

その中に、土を焼いて固めたような赤茶色のかけらがあつた。小箱の中にあつたその他
のものは何らかの価値があるとわかつていたので、茜が持ち出すことは禁じられていたの
だが、何なのかわからないそのかけらだけは、自由に持ち出すことができた。茜はそれを、
「古代の魔法使いが作った秘密のお守り」で、持っていれば特別な力を発揮できるのだ、

と勝手に妄想して、テストとか、音楽の発表会とか、緊張する行事の時には必ず持つて行った。不思議なことに、そのかけらを持つていると実際に力が湧いてくるような気がして、困難な状況でも乗り切ることができた。

天野さんの持つていけるかけらを見たとき、茜はそれが自分の「お守り」と同じものだと直感したのだった。

(三)

茜の家から歩いて15分ほど、小さな商店街を通り、駅前の踏切を渡って少し山手に行ったところに、市立図書館の分室があった。石造りのごつごつとした外壁を、びっしりと緑のツタが覆っていて、小さいが威厳のある建物だ。正面の古い木製の入口は閉鎖されて

いて、新館に設けられた二重の自動ドアを通って新館の中から反対側に回り、建物の中の入口から入るようになっていた。閉鎖された入口の内側には本棚が置かれて絵本が並べられていたが、見上げると入口の枠の部分はギリシャ神殿の柱のようなものが支える重厚な造りになっていた、歴史を感じさせた。

内部には木製の本棚が4列に並び、壁面にも本棚が置かれて、一般書と児童書に大別された本が整列していた。本館と比べると本の数はずっと少なかったが、茜はここに並んでいる本を眺めるのが好きだった。

その日、分室に入って少し進んだところで、本棚の向こうの端に置かれた正方形のストールに座っている女の子の後ろ姿が目に入った。

彼女が自分と同じ制服を着ているのに気がついて、茜は緊張した。全く知らない人なら気を遣うこともないが、もし顔を知っている相手だったら、どのように接したらいいのか、

確信が持てなかったからだ。

音を立てないようにゆっくりと近づいていくと、最初は本棚の陰に隠れていた女の子の横顔が、少しづつ見え始めた。

そこにいたのは天野さんだった。両手で本を開き、周囲のことは全く目に入らない様子で、それに見入っている。教室では見たことのない生き生きとした表情で、まるで別人のように思えた。

こうしてクラスメイトと出会うのは、茜が最も避けたいことだった。でも、幾度となく思い描いてきた、学校以外の場所で天野さんと話すチャンスでもあった。頭の中で妄想と現実がちや混ぜになり、思考力を失ったまま、茜はふらふらと彼女に近づいて、元氣よく声をかけた。

「こんにちは、天野さん。」

彼女はバネにはじかれたように身震いして振り向くと、まだ体を震わせながら、ようや

く小さな声で「こんにちは。」と返事をした。

「この図書館、よく来るの？」

なぜだろう、まるで誰かが乗り移って勝手に話しているように、すらすらと言葉が出てくる。

「この本が読みたくて、ときどき借りに来てるの。本屋さんには、もうないから。」

天野さんは、読んでいた本を閉じて、こちらに差しだした。

「花まつりの夢」

ページを開いてみたら、ふんわりとした感じの大きめの挿し絵がたくさん入った、絵本と普通の本の中間のような本だった。女の子が夢の中で体験した出来事について書かれているらしい。

読んでいると何だか心地よくなって、茜は思わずページを読み進めていたが、天野さんがじっとこちらを見ているのに気がついて、本を返した。

「ありがとう。いい本ね。」

「ありがとう。」

それから何か楽しい話題を切り出そうとして少し考えたのだが、何も思いつかないので、少し勇気を出して聞いてみた。

「天野さん、教室で何か黒いかけらを持っているのを見たんだけど、あれって、お守りなの？」

「どうして…。」

彼女がまた少し震えているのがわかった。不信と警戒が沸き起こっているのが伝わってきて、茜は慌てて自分のお守りを取り出した。

「これ。色は違うけど、私も持つてるから。」

天野さんは驚いた表情になってしばらく固まってから

「すごい。」と叫んだ。

「私の他にも、こんなお守りを持っている人がいたなんて。」

そう言った天野さんの笑顔は、とてもかわいいと思った。

「今日は会えてよかった。これからもよろしくお願いします。」

天野さんは小さな声で「こちらこそよろしくお願いします。」と返事をした。

「それじゃあ、また学校でね。」

「ええ、また明日。」

天野さんと別れた後で、茜は自分がすごくドキドキしているのに気がついた。天野さんと話ができて、彼女と少しだけ近づくことができて、本当によかった。でも、自分は天野さんの友達になるには、あまりにも空っぽで、つまらない存在で、何となく後ろめたいような気がして、心が落ち着かなかった。

あくる日から、茜は登校と下校の時に天野さんとあいさつを交わすようになった。そして、時には分室で見つけたお気に入りの本を学校に持って行き、天野さんに紹介して感想を語り合った。周りの目が気になるので、他のクラスメイトたちのように一緒に昼食を食べたりはできなかつたのだが、天野さんが笑顔で応じてくれるのがとても嬉しくて、自分のいる世界が変わったように感じられた。

何週間かが過ぎたある日、茜は天野さんを家に誘った。彼女は少し戸惑っていたが、「行きます。」と返事をしてくれた。

天野さんは、魔法使いのような個性的なファッションで茜の家を訪れた。母が買ってきたケーキをみんなで食べながら、茜は家の外の世界とつながることができた喜びをかみしめた。

その二日後だった。

「ねえ、日向さん。」学校からの帰り道で声をかけられた。

同じクラスの白崎さん。勉強も運動も優秀、そして絵の才能は県の絵画コンクールに何度も入賞するほどで、先生たちの信頼も厚い生徒だった。茜には近寄りがたい人のように思えて、これまで一度も話したことがなかった。

「最近、よく天野さんと話しているようね。」

「はい。天野さんも本が好きみたいだから。」

「でも、気を付けた方がいいよ。」白崎さんが、ちょっと深刻な顔になって言った。

「どうして？」

「この間、隣のクラスの子が河原で転んで怪我したの、知ってる？」

「うん。」

「あれ、天野さんが呪いをかけたんだって、みんなが言ってるよ。」

「まさか、そんなことできるわけが……。」茜は驚いて声を上げてしまった。

白崎さんは口の前に人差し指を立てて、静かにするようにジェスチャーしてから言った。

「天野さんが何か黒いかけらを持ってお祈りみたいになっているの、見たことあるでしょう?」

「ええ。でも、あれはお守りだと……。」

「あれは、本当は呪いのアイテムなの。転んだ子が何かで天野さんを怒らせてしまったことがあって、天野さん、あの黒いかけらを突き付けて、『お前を呪ってやる』って言ったそうよ。」

「信じられません。」

「信じないなら仕方ないけど、天野さん、あなたが付きまよってくるのがうっとうしいって言ってるらしいよ。あなたもきつと、呪いのターゲットになってる。」

白崎さんは、そのまま先に歩いて行った。

茜は、しばらく呆然としてその場に立っていた。天野さんがそんな人だとは思いたくなかった。しかし、心を満たしていた安心感と幸福感は、あっけなく崩れ去ってしまった。

次の日の帰りにも、白崎さんは声をかけて来た。

「大丈夫？ 何も起こってない？」

「何もありません。」

そう言ったが、昨日、ぼーっとして歩いていたので、転んでひざをすりむいてしまったのだった。

「何もなかったんならよかった。でも、このままじゃ心配ね。」

「どうして？」

「天野さん、周りのみんなが自分にひどいことをしていると思い込んでいるのよ。それ

であの黒いかけらに怨念を注入し続けているから、いつかは自分でもコントロールできなくなつて、暴発してしまう。日向さんにも恐ろしいことが起こるかも知れない。それに、呪いのエネルギーはかけている人にも向かつて、天野さんの人生も破滅する。」

「そんな…。」

「でも、一つだけみんなが助かる方法があるわ。」

「何ですか。」

「あのかけらを、天野さんから遠ざけるの。そうすれば、天野さんも人を呪つたりしなくなる。」

「でも、どうやって？」

「天野さんがあのかけらを机に入れておるときに私が声をかけて連れ出すから、その隙にあなたがかけらを取ってどこかに隠して。きつとうまくいくわ。」

「そんなの、無理です。」

「それしかないの。じゃあ約束ね。」

白崎さんはそう言うと言ってしまった。本当は断りたかったのだが、白崎さんには逆らうことができない何かがあった。

その時は、次の日に訪れた。

昼休み、茜が天野さんの席に行って話していると、白崎さんが「ちよつといい？」と声をかけて、天野さんを連れ出したのだ。白崎さんは茜に目で指図してから、天野さんといっしょに教室を出て行った。

茜は何かの力に突き動かされ、天野さんの席に行って机に手を入れた。何人もの視線が一斉に自分に注がれたような気がして、慌てて身体で手を隠しながら机の中を探る。

あった。茜の「お守り」とは少し違う感触だった。震える手で、落としそうになりながらかけらをポケットに入れ、急いで自分の席にもどった。

ちょうどその時、白崎さんと天野さんが教室に入ってきた。白崎さんは自信に満ちた笑顔をこちらに向け、天野さんは憂鬱な顔で席に着いた。

それから数分もたたないうちに、天野さんは黒いかけらがなく、気がついたようだった。最初は少し不思議そうな顔で机の中を探っていたが、やがて泣きそうな表情になって必死に探した後、机に伏してしまった。

それを見ている茜のつらい気持ち絶頂に達した時、天野さんは急に立ち上がって、泣きそうな表情のまま歩いてきた。

「日向さん、私のお守り知らない？」

「ううん、知らない。」

自分の返事がそつけないことにショックを受けながら、茜は心の中で繰り返した。

「ごめんなさい。でも、これはあなたのためでもあるの。」

数日後。

「ねえ、今度の日曜日、みんなでガーデンズに行くんだけど、日向さんも来るよね。」
茜は、教室で白崎さんから唐突に誘われた。

白崎さんの父親は何かの事業で成功したらしくて、一家は大きな邸宅で裕福な暮らしをしていた。彼女もお金に不自由することはなく、普段から最新のファッション、グルメ、エンタメ、イベント、ショッピングなどに親しんでいたのも、教室ではいつもクラスメイトたちに囲まれて話の中心になっていた。白崎さんと一緒にショッピングに行きたいと思っている生徒は多かったが、一回に誘ってもらえるのは、彼女が選んだ数人だけだった。そんなことが頭に浮かんだからではなかったけれど、茜はすぐに「はい、行きます。」と返事をしてしまった。

「10時に西宮北口駅のカリヨン広場でね。」

白崎さんの明るい声が、変に重たく感じられた。

日曜日、少し早くカリヨン広場に着いた。白崎さんたちの姿を見かけ、近づいて声をかけようとしたのだが、突然彼女たちが爆笑したので、茜はその声に圧倒されて思わず人垣に身を隠した。

「天野さん、かなり落ち込んでるみたいね。」いつも白崎さんと一緒にいる堀口さんの声が聞こえた。

「いい気味よ。あんな気持ち悪い絵ばかり描いてコンクールの出品者に選ばれるなんて、何様だっていうの。美術の先生、頭おかしいんじゃない？」白崎さんが答えた。

「それにしても、日向さんにやらせたの、正解だったね。」

「天野さんは友達をなくすことになったし、一石二鳥ってやつ？ あの子、思ってたよ

り使えるみたい。これからも役に立つてもらおうではないか。」白崎さんがおどけた調子で言ったので、また爆笑が起こった。

茜はしばらく動けなくなっていたから、たった今来たかのように彼女たちの前に出た。

「ごめん、急用ができて、行けなくなった。」

「ちょっと、どういうつもり？」堀口さんが言うのを無視して歩いていく。本当は白崎さんたちを強く非難しなければならぬところなのに、こんな反抗しかできない自分が情けないと思った。

このまま家に帰ったら、きっと家族に変に思われる。でも、辺りをうろついていたら白崎さんたちと会ってしまうかもしれない。用事があると言った以上は、どこかに行かなければいけない。茜はとっさに宝塚行きのホームに降りるエスカレーターに向かった。

宝塚行きの電車に乗ると、すぐに発車した。宝塚駅までの15分間が、あつという間の

ようにも、とてつもなく長い時間のようにも感じられた。

「これからどこに行こう？」

電車の中で考え続けた茜は、宝塚駅に着く間際になって、駅前のソリオ宝塚にもガーデンズと同じ阪急百貨店があることを思い出した。

改札口を出て、まっすぐ行った正面の入口から阪急百貨店に入ると、香ばしいパンの匂いがした。おいしそうなお弁当、色とりどりの野菜やくだもの、高級感のあるお菓子、上品な生活雑貨や洋服……。にぎやかな店内を歩いていると、予定通りのところに来ることができた気がして、少し心が楽になった。

ひと巡りして渡り廊下のような場所に出たとき、そこから吹き抜けが見渡せるのに気がついた。階下から階段が伸びて、その先が小さなステージになっていたが、直接は行けない。まるで立体迷路みたいだと思いつながら、引き返してエスカレーターで1階に行き、中央の大きな階段を下りる。

真上にある八角形の天蓋から光が降り注ぐステージに立つと、世界の中心にいるような気がした。そして、これでいい、今日の主演は白崎さんじゃなくて自分なんだ、と思った。駅に戻る途中で、本屋さんの前を通った。「あなたも心の旅へ 文芸書フェア」という看板がかかって、ワゴンに本が並んでいた。茜は何か強く引きつけられるものを感じて、その中の一冊を手を取った。

「花まつりの夢」

まさか、あの本？ 中を確かめてみたらまちがいない。図書館にあったのは表紙がなかったから遠目にはわからなかったが、天野さんが読んでいたのと同じ本だった。

茜は、エプロンをつけて本を並べている店長さんらしい人を見つけて声をかけた。

「すみません。これ、もう売ってない本じゃないんですか？」

「ああこれね。閉店した文芸書専門店の店主に、在庫を譲ってもらったんです。いい本がたくさんあったから。」

「この本、買います。」

「ありがとうございます。」

急いで家に帰った茜に、母が言った。

「天野さん、急に引越すことになったんだって。『これまでありがとう』って、あいさつに来てくれてたわよ。」

彼女はお礼だと言って、色紙に描いた絵を置いていったそうだ。

茜は「花まつりの夢」を抱えて天野さんの家に走ったが、着いた時にはもう表札は外されて、人の気配はなかった。呼び鈴を繰り返して押し試してみても、電子音が空しく響くだけだった。

天野さんが引越してから、茜はまた休み時間を一人で過ごすようになった。それどころか、クラスメイトの誰もが茜と話をするのを恐れていたような気がするのだが、白崎さんたちとの約束を下タキャンしたのと関係があるのだろうか？

自分が天野さんにしてしまったことを考えるのは、もっとつらかった。なんとか天野さんに謝ろうとして先生に連絡先を聞いてみたが、教えてもらえたのは転校先の学校だけ。それ以上は答えられないと言われた。どういうわけか、顔の前に見えない手があつて、ずっと押さえつけられているような感覚が続いていた。

3年生になって、創立記念日で学校が休みになったとき、茜は天野さんに会いに行く決心をした。

電車とバスを乗り継ぎ、初めての場所に降り立って、地図を片手に何度も道に迷いながら、天野さんのいる学校にたどり着いた。門は閉ざされていたが、インターフォンで職員室に連絡し、出てきた男の先生に自分の生徒手帳を見せて、転校した友だちに忘れ物を届けに来たのだと説明すると、先生はちょうど休み時間だった教室に案内して、前で待っていてくれた。

天野さんは教室の隅の席に座って何かの絵を描いていた。

「天野さん。」

茜が声をかけると、こちらを向いた彼女は目を見開いてから、満面の笑みを浮かべた。

「日向さん、どうして…。」

「今日は創立記念日で休みだったから、会いに来ました。」

天野さんは席から立ちあがった。

「久しぶり。来てくれてありがとう。」

その嬉しそうな様子に、またつらい気持ちになりながら、茜は言った。

「実は、天野さんに謝らなければいけないことがあって……。」

不思議そうな顔の天野さんの机に、茜は鞆から黒いかけらを取り出して置いた。

「これを隠したのは、私なの。」

ダン！ 大きな音と振動が伝わった。

天野さんが、拳で机を強く叩いたのだ。茜は怯えて一瞬だけ身体を震わせたが、天野さんの方は全身をガタガタと震わせ続けていた。

「ごめんなさい。あなたがこれで私に呪いをかけている、なんて嘘を真に受けてしまったの。本当にばかだったと思ってる。」

「ひどい。信じてたのに。」彼女の目から涙が流れ落ちた。

「ごめんなさい。」頭を深く下げて謝ってから、茜は赤いかけらを出して、黒いかけらと

並べた。

「お詫びになるかどうか分からないけど、私のお守りもお渡しします。」

天野さんは、黙ったまま動かなかった。茜は、続けて鞆から「花まつりの夢」を取り出すと、机の上に置いた。

「天野さんにプレゼントしようと思って買ったんだけど、引越しに間に合わなくて渡せなかったの。よかったら受け取ってください。」

天野さんが反応しないので、茜はもう一度頭を下げてから教室の出口に向かった。

「待って。」呼び止められて茜が振り返ると、天野さんが赤と黒のかけらを差し出した。

「これ、やっぱり日向さんが持っていて。」

立ち尽くす茜に、天野さんが言った。

「私ね、このお守りがないと生きていけないって思ってた。なくなつた時には必死で探

したし、いくら探しても見つからなかったから、自分はもうだめだ、と思った。でもその時に、私にも友達になってくれる人がいたんだから、もしかしたらお守りがなくても大丈夫かもしれない、って気がついたの。それから、つらいことがあったときには日向さんのことを考えて乗り切ってきた。だから、お守りは日向さんにあげる。」

2つのかけらを受け取った茜の目にも涙があふれた。

「だけど、この本はもらうね。こっちの図書館には置いてなかったから、読めなくて困ってたんだ。ありがとう。」天野さんは「花まつりの夢」を両手で胸に抱いた。

天野さんに別れを告げて廊下と校庭を抜け、先生にお礼を言って校門を出てからも、茜の涙は流れ続けた。ただ、顔の前にあった見えない手は、いつの間にか消え去っていた。

しばらく、青木さんの姿を見ていない。たまたま用事がないだけかもしれないけれど、もしかしたら、プライベートな友達でもないのに食事に誘ったりしたから、警戒されてしまったのだろうか？

みそのは中庭の空を見上げた。雲の切れ間から、天使のはしごが伸びていた。

「すみません。」

振り向くと、赤いニットを着た女性が立っていた。

「屋根瓦の色のことについて知りたいのですが。」

「屋根瓦ですか？ 瓦の色と言っても、釉薬というものをかけて色を付けている場合が多いのですが、釉薬をかけない素焼の瓦の色、ということでしょうか。」

女性は少し考えていたが、何かに思い当たったように元気な声で答えた。

「そう、素焼の瓦です！ 赤い色や黒い色の素焼の瓦について、教えてください。」

「わかりました。屋根瓦などの建物関係の資料は、まちづくり館にあります。みそのは女性をまちづくり館に案内した。」

まちづくり館に入って、街並みの巨大なジオラマや、精密に再現された様々な建物、そして建築物の構造や設備などを学べるコーナーなどの前を通りすぎ、建材のエリアに着いた。屋根瓦は、一番手前に展示されていた。

「左にあるのが素焼の赤瓦です。真っ赤と言うよりは少しオレンジがかかった赤茶色ですが、『赤い瓦』というのは、これですね。」

「はい、これです。」

「その隣が『いぶし瓦』です。こちらにもよく見ると黒っぽい銀色をしています、日本

の伝統建築で使われている『黒い瓦』というのは、これだと思えます。」

「そうです。この瓦でまちがいありません。」

「ただ、いぶし瓦は、いぶす工程で表面に炭素の膜がついているので、素焼そのものの色とは言えないかも知れません。」

「それでは、いぶし瓦の中は、やはり赤茶色なのですか？」

「いいえ。ここに断面が展示してありますが、いぶし瓦の中は黒い色をしています。それから、その右の瓦を見てください。」

「こっちは本当に黒い色ですね。」

「淡路島で作られている『黒いぶし瓦』です。いぶし瓦をさらに焼くことによって、炭素の膜を取り除いています。これこそが『素焼の黒瓦』と言っていいでしょう。」

「おしやれな感じのする瓦ですね。それでは、なぜ素焼の瓦は赤かったり黒かったりするのでしょうか。」

「それらの色を作っているのは、鉄です。」

「鉄、なんですか？」

「こちらをご覧ください。」展示ケースの中に、透明な容器に入った粉末が3つ置かれている。一番左の1つだけが赤く、他の2つは黒い粉末だ。

「これらは皆、『酸化鉄』という化合物です。左から Fe_2O_3 、 Fe_3O_4 、 FeO 。どれも鉄の原子と酸素の原子が結びついてできていますが、その比率が違います。」

「この『酸化鉄』が、瓦の色のもとになっているのですか。」

「実際には酸化鉄以外の成分も影響していますが、多くの酸素が結びついた酸化鉄は赤く、少ない酸素が結びついた酸化鉄は黒く発色することが、素焼の瓦の色の大きな要素になっています。つまり、原料である粘土を焼いて瓦を作るときに、酸素が十分に供給されていれば、粘土に含まれている鉄分が赤く発色して赤い瓦に、酸素の供給が制限されていれば、鉄分が黒く発色して黒い瓦になるというわけです。」

「そうだったんですね。よくわかりました。」

女性は晴れやかな表情を見せた。

「この近郊の建物って、赤い瓦を使っているものが多いように思うんですが。」

「それには、スパニッシュコロニアル様式の流行が関係しています。」

『『スパニッシュ』って、スペインのですか？』

「スペインのものではなく、スペインの植民地だったところで発達した、スペイン風の建物の様式です。赤い半円筒形あるいはS字形の瓦、クリーム色の塗り壁、アーチ形の開口部などが特徴です。装飾的な鉄製の柵や扉、四つ葉模様のデザインが使われることもあります。」

阪神間では、六甲山の緑や、六甲花崗岩が風化してできた白い砂による明るい色の地表、などといった地域の風景とよく調和していることから、20世紀の前半に多く建築されま

した。アメリカ出身のウィリアム・メレル・ヴォーリズが設計した関西学院大学や神戸女学院大学が代表的なものです。そして私たちがいるこの建物も、スパニッシュコロニアル様式で建てられています。

阪神間で近年になって建てられた施設や住宅にスペイン風の赤い屋根の建物が多く見られるのにも、この様式の影響があると思います。」

「なんだか普段見ている風景が素敵に思えてきました。お話、聞けてよかったです。」

「ところで、屋根瓦に関心をお持ちということは、何か建築関係のお勉強をされているのですか？」みそのが聞いた。

「いいえ。実は……。」

女性はバッグから白い布の包みを取り出すと、慎重に開いた。そこには、瓦を薄くしたような、赤茶色と黒のかけらが入っていた。

「私が昔、お守りにしていたものです。これが本当は何なのか、気になっていたのですが、このあいだ、赤い瓦と黒い瓦を見たときに色が似ていることに気がついて、瓦と関係があるのではないかと思っただけです。」

みそのは2つのかけらを包みごと受け取って、しばらく観察してから言った。

「よろしければお預かりして調べてみますが、いかがでしょうか。」

「本当ですか。ぜひお願いします。」

彼女は嬉しさを抑えきれない様子で、みそのが用意した調査申請書に震える手で記入すると、お札を言って帰っていった。

その赤茶色と黒のかけらには、見覚えがあった。

博物館の春川さんから連絡があつたのは、次の日曜の朝だった。「調査が済みました。お預かりしたものをお返しします。」と言われて、茜は博物館に向かった。

「これが何なのか、わかりました。」春川さんが言った。

茜は胸の高鳴りを感じながら、2つのかげらを受け取った。

「どちらも千年以上前に作られた土器の破片でした。赤茶色の方が土師器（はじき）、そして黒い方が須恵器（すえき）です。」

「えっ、千年以上前ですか？」茜は声を上げた。

「そうです。土師器は弥生式土器の流れを受け継いで、古くから国内で作られていた土器、須恵器は大陸から新しく伝わった技術によって、5世紀ごろに作られるようになった土器です。」

「ありがとうございます。もしかしたら、これも瓦と同じように鉄分による色なのでしょうか。」

「そのとおりです。土師器は酸素の多い環境で焼かれているので赤茶色に、須恵器は酸素の少ない環境で焼かれているので黒い色になっています。」

茜は、受け取った2つのかけらを改めて眺めた。そして、自分は本当にありがたいお守りを持っていたのだと思った。

春川さんが聞いた。

「これは、どのようにして入手されたものなのでしょうか。」

「赤い方は昔から家の宝箱にあったもので、いつ誰がどうやって手に入れたのか、わかりません。黒い方は友人からもらったものです。」

「この2つがめぐりあうなんて、何か不思議な力を感じますね。よかったら、そのお友達にも知らせてあげてください。」

「そうしたいのですが、彼女とはもう長いこと会っていないので、連絡先も、どこでどうしているのかも、わかりません。」茜にとって、それだけが残念なことだった。

しかしその数週間後、茜はある人気雑誌のインタビュー記事で、現在の天野さんの姿を知るようになった。

「幻想画の新星 天野麗夢（あまのれむ）」

そして彼女が「心の支えにしてきた本」として手にしていたのは、茜が贈った「花まつりの夢」だった。

（赤と黒 了）

(一)

「頭の中が真っ白になる」とは、あんな状態を言うのだろうか。僕はしばらく、思考が先に進まないまままで固まっていた。

この一か月間、僕は誰も知らないダイヤモンドの鉱脈を掘り当てたような気分だった。もちろん、浮かれていますはいけないのはわかっていたし、成功に向けて努力をしていたつもりだったのだが、結果として大きな幸運を逃してしまった。

今になって考えれば、僕のような者が手を出せることではなかったのかもしれない。それでも、僕は何か運命のようなものを感じて、やれる気になっていた。そして、そこには確かな手ごたえと、何にも代えがたい喜びがあった。

こうなったのは、僕が選択を重ねてきた結果だ。最初から違う選択をしていれば、全く違う状況になっていたのだろう。しかし、本当にその方が良かったのかどうかもよくわからない。

ただ、何らかの代替策を考えなければならない、ということだけは確実だった。

(二)

一か月前、午後が休みだった僕は、ふと懐かしくなって帰りの電車を宝塚南口駅で途中下車したのだった。駅の西側には宝塚ホテルがあつて、子供のころ、年に1回ぐらいは家族で食事をしたものだ。今では移転してしまい、跡地には大きなマンションが2棟立っている。

高架の下を抜けて駅の東側に出た。駅前のロータリーの広場には、昭和の時代は立派な噴水があったらしいが、僕が初めて見たときには、金属管の車止めのような形の水景モニュメントに変わっていた。その日は何かのイベントで、モニュメントから流れ落ちる水の前でロックの演奏をやっていたような記憶があるのだが、今はもう水はない。駅前のサンビオラの3番館では、ファミリーランドに行った帰りに食事をしたことがある。ここも今は大きなマンションになっている。

ショッピングセンターとして営業を続けているサンビオラの1番館で買い物をして帰ろうとしたとき、階段の登り口のところ、上の階にある国際・文化センターの催し物の案内が貼ってあるのが目に入った。

「天野麗夢 個展」

知らない名前だったし、個展というものには行ったことがなかったのだが、その時はなぜだかとても気になって、横の壁に小学生の絵がたくさん貼ってある階段を上った。

国際・文化センターの入口から交流スペースを通って、右手にギャラリーがあった。中に入ると、受付席には全身黒のドレスの胸のところにオレンジ色の花をつけた若い女性が、全く動かずに座っていた。きっと彼女が天野麗夢なのだと思った。

その時の客は僕一人だった。黒い布を張ったボードを背景に二十数点ほど掲げられた絵は、水墨画のような風景に建造物や動植物、そして人物が淡いタッチで、しかしリアルに描かれていた。それは絵の具の濃淡で表現されたものでありながら、光と影、色合いの変化、寒さと温かさ、自然の営み、人の気持ちなどが直接意識に働きかけてきて、見ていると、夢の世界に入り込んだような不思議な感覚に満たされた。

会釈をしてギャラリーを出ようとしたら、受付にいた女性が慌てて立ち上がると、深くお辞儀をして「ありがとうございます。」と言った。少し驚いてしまったが、その瞬間、ある考えが閃いた。

そのころ、僕の職場では、次回の新生活応援セールの際に一定額以上の利用があったお

お客様に進呈する販促品についての提案を募集していた。僕は天野麗夢の複製画を、その販促品にしてはどうかと思いついたのだ。ちょうどその少し前に、極めて精巧な複製画を安価に製作する事業を始めた会社があつて、話題になつていたところだった。あの技術を使えば、販促品用のサイズに縮小したとしても彼女の絵の雰囲気を再現できるし、製作費も予算内に収まりそうだ。まだ世間に名前が知られていない天野麗夢なら、絵の使用料もそれほど高くないはずだ。販促品として人気が出るのかどうかだけが懸念材料だったが、僕には、彼女の絵が多くの人々の心を捉えるだろう、という実感があつた。

僕は早速、個展で手に入れたチラシをもとに企画書を作成して店長に相談した。店長も「これはいい。」と言つてくれたので、複製画の製作会社から見積もりをとつて添付した上で提出したら、候補案に選ばれて本部でプレゼンテーションをすることになった。そして審査の後、そのまま採用が決まつた。

そんなとき、複製画の製作会社から連絡がきた。

「複製画はご好評をいただいております、今後は原材料と製造設備の不足が見込まれます。確実に納期までに対応するためには、至急ご発注願います。」

普通なら、絵の使用権を確保してもいないのに複製画を発注するなんてあり得ない。しかし、ここまで来て複製画の製作が間に合わなかったら、プロジェクトが中止になってしまう。僕は躊躇せずに発注した。天野麗夢の絵を使用できないという事態は起こるはずがないし、万一そうなったとしても他の人の絵で製作する道があると考えたからだ。

それから僕は原画の提供に関する契約書の案を作成し、安全な輸送手段を確保するなど準備を進めた。そして、天野麗夢の商談を受け付けているウェブサイトにもこの話を持ち掛けたのだが、帰ってきたメールはこんなものだった。

「お申し出の件、光栄に存じます。しかしながら、最近、同業の他社様から全く同様な発注をいただいております、お受けした場合、これと競合することになりますことから、お受けすることができません。たいへん申し訳なく思っております。貴社の益々のご発展をお

祈り申し上げます。」

全くの想定外だったが、この時点では、他の人が書いた魅力的な絵を探して発注すれば何とか挽回できると思っていた。しかしその少し後、ある雑誌のインタビュー記事をきっかけに、天野麗夢は突然脚光を浴びることになったのだ。そしてそれに呼応するように、ライバル社が彼女の複製画を次期セールの販促品として採用することを発表し、早くも話題にのぼり始めた。

もし配布するのが別の販促品だったら、直接比べられることはなかっただろう。しかし、同じ複製画を配布して、天野麗夢に匹敵するほどの人気になれば、それは敗北を意味していた。わが社の実施するセールそのものが、ライバル社に比べて安っぽく思われてしまう可能性さえあった。

それから1週間、僕はわずかな期待に背中を押され、可能な限りの有給休暇を取得して、販促品に使う絵を探し回った。行けそうな展覧会には全部行った。名前が売れていない作家でも才能を感じさせる絵はたくさんあったが、注目されている天野麗夢と比べたら、アピール力が足りなかった。有名な作家の作品で販促品にふさわしいものはいくつも見つけたが、問い合わせしてみると、どれも使用料が予算を超えていた。そして気づかり焦る中で空しく時間は過ぎ、美術の素養のない自分にとって、これは無理な取り組みだったことを思い知った。

そもそも、僕は本当に天野麗夢の才能を見抜いていたのだろうか。偶然遭遇した彼女の、妖艶な見た目とは少しギャップがある誠実そうな態度に好感を抱いて、無意識に高く評価していただけではないのか。

違う。

僕は確かに、彼女の絵には見た人を幸せにする力が宿っていることを感じていた。だから、より多くの人に彼女の絵を知ってもらいたいと思ってこの仕事を進めてきた。それは決して間違っていないかと思ふ。

ただ一つ運が悪かったのは、僕よりわずかに早く行動を起こした人が、よりにもよって同業者だったということだ。

複製画の製作会社に原画を提供する期限がせまっていた。

(四)

記録的な大ヒットになっている商品があった。

「マダムフォン」

二か月前、あるメーカーが「大人の女性のスマホ」と銘打って売り出した高級スマートフォンで、かなり高めの価格設定にもかかわらず、生産が追いつかないほどの売れ行きになっていった。僕が勤務している店でも入荷待ちが続き、毎日、新たに受け付けた予約票がたまり続けていた。

マダムフォンは「情報機器に不慣れな人でも快適に高度な機能を使いこなせる」ことをコンセプトにしており、スマートフォン未経験者や初心者を集めて試作品を長期間使ってもらい、その声を反映させながら開発を進めたそうだ。

搭載された高性能カメラは、人が見ているそのままの光景を正確に写し取り、位置や角度の情報も合せて保存される。液晶画面は道案内のツールにもなり、映った山、川、道、建物などの名称を表示する機能もある。指向性マイクを向ければ、鳥や虫の鳴き声から名前を調べたり、人の話し声を文章にしたり、通訳機として使ったりすることもできる。各

種の辞書や事典を内蔵した電子辞書でもあり、調べ物や資料作成にも威力を発揮する。

「クラウドの上に行く機能を持つ」と言われる情報共有システム「ストラトフロー」も標準装備されていた。これは企業内部用に開発されたシステムを転用したもので、個人認証のもとで、様々な情報を安全かつ効率的に共有することが可能になっている。

しかし、マダムフォンが驚異的に売れているのは、こうしたハードウェア、ソフトウェアの性能以外の要因があった。

マダムフォンの漆黒のボディの背面には、百合、睡蓮、雪柳、月下美人、胡蝶蘭の5種の白い花のうちのどれか1つが描かれていた。それは高級感を演出するためのデザインだったが、他のスマホと区別する目印にもなっていた。

発売から間もないころ、ある女性起業家が、「交流会で自分と同じマダムフォンを持っている人を見かけて声をかけたら、意気投合して提携することになり、事業の成功につながった。」とSNSに書いたのがきっかけで、「マダムフォンを使っている人同士がチームを

組めば成功する。」といううわさが広まった。根拠のないことだったが、実際に初対面の人に声をかける口実にはなったものだから、最初は女性起業家たち、次に新たなつながりを求める女性たちの間でマダムフォンが普及し始めた。

少し後には、マダムフォンの5種類の花によって持ち主の性格や他のユーザーとの相性、その日の運勢などを占う「マダムフォン占い」も始まった。さらには、花の種類ごとにユーザーが結成した秘密結社が謎のミッションを遂行するために抗争を繰り広げるといふ、バーチャルリアリティーゲームも配信されて人気になった。

マダムフォンの花の絵を描いたのは「白玲」と称する人だったが、プロフィールは女性であることしか公表されていなかった。マダムフォンが話題になってから、彼女の絵が市場に出れば相当な高額で取引されるだろうと言われているにもかかわらず発注を一切受けていないことが、その存在を謎めいたものにし、様々な憶測を生んでいた。

曰く

大企業の社長夫人か大富豪の令嬢で、お金には全く不自由していない。

有名な画家が匿名で描いている。

天才的な子供が描いた絵で、仕事としての受注はできない。

作者は既に亡くなっていて、生前に描いた未発表作品を使っている。

マダムフォンのメーカーが彼女の絵を独占するため、高額な契約と引き換えに素性を明かすことを禁じている。 等々

やがて彼女はマダムフォンの絵の作者であることから「マダム・ホワイト」と呼ばれるようになり、社長夫人をイメージした想像図がいくつも描かれた。

こうしてマダムフォンをめぐる様々なエピソードが次々と発生し、急速に広まっていたので、世の中の多くの人がマダムフォンを知ることとなったのだが、それだけで高額な

商品が売れているわけではない。マダムフォンには、間近に見た人の誰もが手に入れたくなってしまう、不思議な力があると言われていた。マダムフォンを身に着けることで心豊かに過ごせるような気がしてくるのだ。そしてその源になっているのも、描かれた5種類の花の絵だった。

もちろん、マダムフォンの花の絵、あるいはマダム・ホワイトが描いたその他の絵を複製画の原画に使えたらどんなにいいだろうかと思う。しかし、彼女につながる連絡先は一切公表されていなかった。

僕は何かの糸口が得られないかと、マダムフォンのメーカーに絵の使用許可について問い合わせしてみたが、「当社には絵の使用を許可する権限はありません。」という答えだけが返ってきた。

気になった若手の画家がいた。彼女は「上質なライフスタイル」をテーマにSNSや動画共有サイトで自分の日常を発信し続けていて、若い女性たちから人気があった。彼女の描く絵の方はまだ有名になっていなかったが、僕には、彼女のライフスタイルをお手本にしている女性たちが、その絵を飾りたいと思うようになる、という予感があった。

彼女の名前は「白崎 美華子」と言った。

神戸のギャラリーで個展をやっていて、本人が会場にいる時間帯があるということだったので行ってみた。

数か月ぶりに訪れた神戸の街は、もうクリスマスの装いに覆われていた。街角に立てられたクリスマスツリーには無数の赤や金色のボールと銀色の雪の結晶が飾り付けられ、色

とりどりの電飾が点滅していた。クリスマスソングの流れる中を楽しそうに話しながら行きかう恋人たちの姿が、焦燥をかきたてた。

たぶん、今年のクリスマスも一人で過ごすことになるのだろう。せめて普段は行かないようなおしゃれなレストランを予約して、春川さんに誘ってもらった夕食を思い出しながら、食事を楽しむことにしよう。まあ、それもこの仕事に目途がついていたら、の話だ。

ギャラリーはビルの1階にあつて、通りに面したショーケースに「白崎美華子展」と書かれたポスターが掲示されていたので、すぐにわかった。全面ガラスの扉を押して中に入ると十人ほどの客がいて、そのうち数人は白いスーツ姿の白崎美華子を取り囲んで話をしていた。

僕は展示されている数十点の絵を一つずつ見て回った。人物たちは生き生きとした表情で洗練されたファッションに身を包み、飲食物は香りや味が、行事は賑やかさが伝わって

くるようで、どれも独特なリアリティがあつたが、中でもリビングを描いた絵に目が留まった。その絵を飾っていれば、「上質なライフスタイル」を疑似体験できるような気がしたので。販売価格が表示されていたが、思ったほど高くはない。

白崎美華子の周りにはまだ数人の客がいたが、後ろに並んでいたら、しばらくして順番が回ってきた。

「12番のリビングの絵、すばらしいと思いました。」

「ありがとうございます。」

僕は、電器店の名刺を渡して言った。

「実は、次回の新生活応援セールの際にお配りする販促品を複製画にしようと考えています。あの絵を原画として使わせていただけないでしょうか。」

その時、それまで自信に満ちた態度だった彼女の表情が曇った。

「申し訳ありません。そのようなお話はお受けできません。」

しかしこちら後も後がないので、簡単には引き下がれない。

「絵を1週間ほどお貸しただけならば、販売価格の半額をお支払いします。多くの人に知ってもらおう機会にもなります。悪い話ではないと思うのですが、何か不都合がございましたら、どうか。」

少しの沈黙の後、彼女はうわずった声で言った。

「天野麗夢さんは本物の天才です。あの人と比較されるなんて耐えられません。」

そしてバッグから白いお守りを取り出すと、両手で胸の前に持ったまま、何かに怯えているように震えながら「ごめんなさい。ごめんなさい。…」とつぶやき始めた。

「大丈夫ですか。」近くにいた女性が異変に気づいて声をかけた。皆の視線がこちらに注がれる。

まずい。きっと、僕が彼女に何かして怖がらせたと思われているに違いない。

「すみませんでした。」僕は慌ててギャラリーを退出した。

僕は、押してはいけないスイッチを押してしまったのだろうか。こうしてまた一つ、道が閉ざされたのだった。

(六)

思いがけない知らせがあった。博物館の新作絵画展で、マダムフォンの原画が展示されるというのだ。

マダムフォンの原画も、それを描いたマダム・ホワイトも、僕には手の届かない存在だということにはわかっていたが、どうしても見ておきたいと思った。

新作絵画展の会場になっている美術・工芸館は、企画館の隣にあった。巨大なエントランスホールでは、入場待ちの人々が銀色のポールと、そこから伸びる赤いベルトで仕切られたスペースに列をなしていた。入場制限がかけられているようで、吹き抜けの空間に反響する話し声に耳を澄ませながら10分ほど待つてから、ようやく会場に入った。

展示されている絵画の中には、販促品に使わせてもらえるものがあるかもしれない。本当はそれを探す方が大事なのだが、とにかくマダムフォンの原画のところに行こうと先を急いだ。

それはすぐに見つかった。前に長い行列ができて、係の人が通行整理をしていたからだ。最後尾に並び、数分かかって原画にたどり着いた。

漆黒の空間に浮かび上がる白い花が、神秘的な存在感で僕を幽玄の世界に引き込んだ。その花の放つオーラに魅了され、自分が虫になって、そこに飛んで行こうとするかのよう

な感覚が走った。

誰もがその前を立ち去りがたいらしく、人波に押されて、少しずつ進んでいった。そして最後に、こんな表示があった。

「これらの原画は、製作者の白玲さんから当館に寄贈されました。」

それなら、原画の使用権はこの博物館にあるというのか。いろいろな考えが頭の中を駆け巡り、それを整理することもできないままで、僕は他に使えそうな絵がないか確認することなどすっかり忘れ、すぐに会場を出て企画館に向かった。

企画館のエントランスホールに入ると、遠くの相談コーナーに座っている春川さんの姿が見えた。僕は早速でその前に行って声をかけた。

「こんにちは。この前はありがとうございました。あれからお礼にも来ていなくて申し訳ありません。」

「いいえ。かえってご迷惑ではありませんでしたか。」

「迷惑なはずがありません。すばらしいひとときを過ごさせていただきました。」

「それはよかったです。」春川さんは最高の笑顔を見せてくれた。

「それで、またご相談があるのですが。」

「何でしょうか。」

相談のついでにお礼を言った、みたいになってしまったのを気にしながら、僕は話を切り出した。

「さつき、新作絵画展でマダムフォンの原画を観ました。たいへんすばらしいものですが、あれは博物館に寄贈されたのでしょうか？」

「はい、そうです。」

「実はうちの会社で、次回のセールの販促品として複製画を作る予定なんです。あの絵を原画として使わせていただける可能性はないのでしょうか。」

春川さんは急に困った表情になって、目を伏せてしまった。少しして、彼女は声を絞り出すように答えた。

「お力になりたいのはやまやまなのですが、営利目的に使用することは難しいと思います。ごめんなさい。」

僕は彼女にそんなことを言わせている自分に強い嫌悪感を覚えたが、今は追い打ちをかけるような質問をぶつけるしかなかった。

「それでは、他の絵の使用について、白玲さんになんとか発注の意向を伝える方法はないでしょうか。連絡先が公表されていないのは知っています。無茶なことばかり言ってしまうし訳ありません。」

春川さんはまた少し考えてから、今度は意外にあっさりと答えた。

「わかりました。本来はそんなお取り次ぎはしないのですが、白玲さんは、マダムフォンの原画を寄贈されたときに『何かよい情報があれば知らせてください』とおっしゃって

いました。今回は情報提供だと言ってお伝えします。ただし、よい返事がいただけるとい
う保証はありませんので、ご了承ください。」

「もちろんです。本当にありがとうございます。一生感謝します。」

実際に契約にこぎつけられる可能性は低いかもしれない。それでも、あのマダム・ホワ
イトに取り次いでもらえる自分は、とてつもなく幸運な人間だと思った。

帰り道で、僕はあることに気づいた。天野麗夢が本格的に活動を開始したのは、マダム
フォンが発売されたのと同じころ、つまり、天野麗夢の活動に合わせるように、マダム・
ホワイトは活動をやめているのだ。もし二人がオセロゲームの駒の表と裏のように、交互
に姿を現す存在だったら……。そんな無意味な妄想が頭をよぎった。

「青木さん、お客様がお呼びです。」

店内にいた同僚が、慌てた様子で倉庫に駆け込んできた。

「白玲さん、とおっしゃっています。」彼は言った。

ばかな。マダム・ホワイトが僕を直接訪ねてくるわけがない。

もしかして偽者？ 一瞬そう思ったのだが、部外者は僕がマダム・ホワイトにアクセスしようとしているのを知らないはず。いったい何が起きているんだろうか。

僕は同僚に案内され、急いでその人のもとに向かった。

そこに立っていたのは、ネットで流布しているマダム・ホワイトの想像図がそのまま抜け出してきたような貴婦人だった。白いワンピースのロングドレスに身を包み、黒いサン

グラスと両手で持っている大きな黒いケースの他は、マスク、手袋、ストール、ネックレス、ブレスレット、靴など、全てが白でコーディネートされていた。

「私が青木です。わざわざお越しいただきありがとうございます。」
そう言いながら、こんなあいさつで良かったのか？と不安になった。

「白玲です。私の絵の使用を希望されているとお聞きしたので、参りました。」
彼女は落ち着いた声で言った。僕は、この人がマダム・ホワイトだと確信した。
僕は同僚に頼んだ。

「ごめん。店長に白玲さんが来られたと伝えてください。会議室にご案内するから。」
歩き始めると、彼女の肩を覆っているストールが羽ばたくように翻った。
何か声をかけた方がいいだろうか。

「お荷物、お持ちいたしましょう。」
「いいえ、そんなに重たくはありませんから。」

気品溢れる彼女が、本当は少し重たそうなケースを抱えて歩く様子は、ちよつとユーモラスにも見えた。

会議室に着いた時には一足早く店長が来ていて、息を切らしながら出迎えた。短いあいさつの後、マダムはケースを机の上に置き、僕らと向かい合つて座つた。

「早速ですが。」彼女はこちらに向けて置かれたケースの口の留め金を外し、ゆつくりと開いた。中には半透明の薄葉紙（うすようし）で覆われた、1枚の絵が入っていた。そして覆いが外され、描かれた1輪の白い花が姿を現した。

5枚の細長い楕円形の花びらから無数の糸状のものが伸びて繊細なレース模様を形成し、そこから放たれた柔らかな光が夜の闇を照らして、心が洗われるような崇高な空間を生じさせている。

多くの人々が待ち望んでいるに違いないマダム・ホワイトの新作がそこにあった。

「烏瓜（からすうり）の花です。形が細かすぎるのでマダムフォンには使えませんが、複製画にされるならちようどいいでしょう。」

「すばらしい。これを公開前に見せていただけると、本当に光栄です。」

店長は高揚した様子でそう言うてから、恐る恐る尋ねた。

「それで、この絵の使用料についてなのですが……。」

「お金は要りません。」

「えっ。」

僕と店長は目を見合わせた。

「この絵は差し上げます。ご自由にお使いくください。」

「いや、いくらなんでもそれでは……。」

思わず上げた僕の声の最後に、マダムの声がつながった。

「『恩は忘れません』って言ったでしょ。青木さん。」

マダムは顔を隠していたマスクとサングラスを取った。

「まさか、あなたが…。」

「マダムフォンの原画の後は、他のご依頼を受けずにこれを描いていたんです。今度こそ、お礼をさせてもらいます。」

妙子は、その美しい髪を優雅にかき上げて微笑んだ。

(マダム・ホワイト 了)